Fate/hunter's answer

サイコロK

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Ｆａｔｅ／ｈｕｎｔｅｒ's　ａｎｓｗｅｒ

【Ｎコード】

Ｎ０７８２Ｈ

【作者名】

サイコロＫ

【あらすじ】

聖杯戦争において、凛が召喚したのは赤い弓兵ではなく、橙の狩人だった。三つの正史から外れた物語は、果たして如何なる結末を迎えるのか……。というワケで、『モンスターハンター』のハンターが『Ｆａｔｅ』の聖杯戦争で大暴れする二次創作ＳＳ。元ネタとしては『ＭＨＰ２ｎｄＧ』を使用。また、アーチャーは大遅刻します。ちなみに、Ｆａｔｅ本編のネタバレ注意です。書くのは初めてなので、感想・意見等ありましたら、よろしくお願いします。できるだけ返信しようと思います。ただ、これが自分の勝手な妄想と

いうことは理解していますので、それに対する批判はご遠慮願います。

ハンターの設定（前書き）

自分の妄想では、ハンターは肉弾戦・射撃戦が可能。
セイバーには有利で、キャスターが天敵。
装備変更で他のサーヴァントとも対等以上に戦える。

ハンターの設定

ＣＬＡＳＳ：ハンター
マスター：遠坂凛
真名：ＣＡＰＣＯＭ

性別：男性
身長：１８３ｃｍ
体重：７５ｋｇ

イメージカラー：橙
特技：アウトドア全般（スポーツ以外）
好きなもの：美味い食事と酒、対等な戦い、人をからかうこと
苦手なもの：裏切り、学問

属性：混沌・中庸

能力

筋力：Ａ　魔力：Ｅ－
耐久：Ａ＋　幸運：Ｃ
敏捷：Ｃ　宝具：ＥＸ

道具作成：Ｂ
宝具内のアイテムで作成可能な武器・防具・装飾品・アイテムを作成可能。

装備変更：Ａ

宝具から取り出した武器・防具を一瞬で装備出来る。また、装備に応じた特殊能力を使用可能。

詳細

遥か未来で祖龍を討伐するため、世界と契約した男性。凄まじい力を得、その時代において最強の生物となった。
しかし、彼にとっての世界は色あせてしまった。彼はさらなる戦いを求め、自ら英霊の座に就くのを早めて消滅した。
詳しくは本編で。

技能

狩人の性：A
人外の生物やその属性を持つ相手と戦う際、能力が上昇する。特にドラゴン族に対しては天敵ともいえる程の上昇幅を誇る。

心眼（MH）：A
数多の戦いによって得た観察力。相手の予備動作から行動を予測し、最適の対応が可能。
魔術・魔法と予備動作のない攻撃には効果がない。
また、近接攻撃が弾き返されなくなる。

直感：C
いわゆる野生のカン。危機的状況や興奮状態で効果が上昇する。

戦闘続行：A
一度の戦闘で二回まで致命傷を無効化する。

ただし、アイテムによる能力上昇は消滅する。
単独行動：C
マスターを失っても1日間現界可能。

宝具

狩人の歩み（アイテムボックス）

ランク：E～A＋
種別：対人宝具
レンジ：1～3
最大同時展開：6

彼がハンターとして手に入れた全てが詰まった箱。
彼の時代において最高の武器・防具と、大量のアイテムが詰め込まれている。
空間を繋げることで、中身を自由に取り出せる。ただし、射出は不可能。

説明

ハンターが英霊として手に入れた力は、生前は肉体強化のみ。倍率としては、大剣を片手剣のごとく振り回せるぐらい。
英霊化後は、アイテムボックスの自由展開・アイテム以外の道具作成・一瞬での装備変更が加わった。これは、世界からのバックアップによる。聖杯戦争ではクラス特有のスキルにより可能。
ちなみに初期装備及び特に記述がない時はアカムト（剣士）で武

器未装備。防具の装飾の色は常に橙。アカムト優遇なのは、自分の趣味です。

ハンターの設定（後書き）

次回より本編

第一話『異常英霊』（前書き）

基本的にサブタイトルはＭＨのクエスト名から付けようと思います。
自分の妄想では、伝説とかに出てくるドラゴンは古龍と同レベル。
飛竜や烏竜は、幻想種としての属性を失ってるという設定です。

第一話『異常英霊』

聖杯戦争、それは七組の魔術師と英雄による殺し合い。たった一つの聖杯（願い）を賭けたバトルロワイアル。

参加する魔術師は、英霊をサーヴァントとして召喚、使役し、勝利を目指す。

その参加者に一人の少女がいた……。

――時刻は深夜、自宅地下の工房で、遠坂凛はサーヴァント召喚の儀式を行っていた。

遠坂家は、聖杯戦争における始まりの御三家の一角であり、その勝利は一族の悲願でもある。

当然、準備は万端である。そして、今は凛の調子が最も良い時間帯だ。今朝、何故か進んでいた時計の時間も戻してある。放課後に電話をくれた美綴綾子のおかげだ。

儀式は滞りなく進み、そして終了した。……が、しばらく経っても何も起こらない。

「まさか、失敗？」

イヤな考えが頭を巡る。貴重な宝石と結構な量の魔力を使って、失敗という結果は冗談にもならない。

やはり、触媒を用意できなかったのがマズかったのか、などと考えていると、頭上で“何か”が破裂するような爆音が響いた。

急いで階段を駆け上がり、扉を開けて見たものは、――全壊した家と“元”居間にあったソファーにふてぶてしく座る鎧姿の男だった。

男は全身を黒い装甲と橙色のラインを持つ鎧に覆われていた。男だと判ったのは体格からだ。

一瞬で凛の心には安堵と怒りが溢れ、最終的に怒りが勝った。だ

から、その男に近づいて行って、無言で回し蹴りを繰り出した。それは頭にクリーンヒットし、
「――ッ！？」
痛かった。のたうちまわった。骨にヒビが入ったかもしれない。
冷静に考えるまでもなく、鎧姿の相手を蹴った結果としては当然だ。しかも、当の男は何事もなかったかのように
「ずいぶんなご挨拶だなぁ、おい？」
と言ってのけた。兜で顔は見えないが、間違いなく笑っている。
顔を真っ赤にしながらも、凛は本題に入ることにした。
「貴方、わたしの召喚したサーヴァントよね？」
詰問する凛に対し、男はソファーに寝転びながら
「あぁ。だが、そういうオマエはちゃんとしたマスターか？」
と質問し返してきた。
さっきから思っていたが、この男はムカつく。だから、ここぞとばかりに令呪を見せつけながら
「これでわたしがマスターだって分かったでしょ」
と言ってやる。しかし男は「分かってねぇなぁ」と言いながら
「いいか？　オレが聞いたのは、『オマエが自分の身ぐらい自分で守れるか？』ってことだ。
ガキのお守りは性に合わねぇし、せっかく聖杯戦争に参加出来たのに、マスターがやられて、戦えずに終了ってのは最悪だからな。
なぁに、オマエはこの家の地下室にでも隠れてればいい。ただ、死にそうな時以外、令呪は使うな。迷惑だ」
その男の言葉に凛は再びキレた。
「もう我慢の限界よ！　そこまで言うなら、使ってやろうじゃない！！」
令呪を使用するための呪文を唱える。下す命令は絶対服従だ。
男は慌てて立ち上がるが、もう遅い。令呪が発動し、……男が口を開いた。
「やれやれ、想像以上のバカのようだ」

令呪が効いた様子はない。しかし――
「こんなバカ、目を離すと何をしでかすか分からん。
幸いにも魔術師としては優秀のようだ。お守りの必要はないだろう」
話を進めるため、凛は前半を無視して質問する。
「それってどういうコト？」
「オマエの命令には強い強制力を感じる。それに、魔力提供量も充分だ。だから、共に戦う相棒として認めてやると言ってるんだ」
魔術師としての能力と令呪の効果は比例する。それ故、男は凛を認めたらしい。
しかし、発言からして、服従している様には全く見えない。
だが、気にしていても仕方ない気がしたので、次の質問に移る。
「……で？　貴方、何のサーヴァント？」
聖杯戦争に呼び出されるクラスは七つ、即ち、
セイバー
ランサー
アーチャー
ライダー
キャスター
アサシン
バーサーカー
この七つのクラスからその英霊に適したものが選ばれる。
見た目からして、セイバー、ランサー、ライダーのどれかだろう。
個人的には最優のサーヴァントであるセイバーだと嬉しい。しかし、男は、
「あぁ、オレはハンターのサーヴァントだ」
聞き慣れないクラスを言いやがった。
最初は何か勘違いでもしているんだと思った。
稀にイレギュラークラスのサーヴァントが召喚されることもあるが、ハンターなんてクラス、聞いたこともない。

しかし、持っている武器を見て、さらに混乱した。出るわ出るわ、剣・刀・槍・銃槍・鎌・斧・鎚・棍棒・巨大な笛・盾・弓・砲・鎧、挙げ句の果てには、武器ですらない様にしか見えないものまでが山の様に。

本人曰わく、これらを収納する空間と中身で一つの宝具らしい。

だから、ハンターとはいくつかのクラスを併せ持っているクラスだと思うことにした。

そう考えると、十徳ナイフみたいで便利かもしれない。しかし、理解と同時に新たな疑問も生まれる。

「ハンターがどんなクラスなのかは分かったわ。それでアンタ、何処の英霊なのよ？」

そうなのだ。凛の知る英雄に、このような英雄はいない。

「何処のっていうより、何時のって聞いた方が良いな。……そうだな、現代からすると五千年後ってところか。

今までに他の英霊と会った記憶もないし、オレのことを知っているヤツは多分いないだろう」

凛は、ハンターが未来の英雄であることに少し驚くが、それなら納得がいく。

また、サーヴァントが聖杯から与えられる知識は、過去から現代までのものである。

つまり、真名を知られても何も問題ないが、知名度による恩恵も受けられないということだ。もっとも、ハンターより未来の英霊が召喚されていたら話は別だが。

色々考えていると、今度は逆にハンターが質問してきた。

「ところで、オマエはどんな魔術を使うんだ？」

「わたしの家系が得意とするのは宝石を使った魔術よ」

その言葉に、ハンターは何か思い当たったようで、宝具の空間に手を突っ込み、何かを取り出した。取り出したのは、ピュアクリスタル・紅玉・古龍の宝玉や眼球等のハンターが持つ宝石の数々だった。

それを見て、凛は歓喜した、ピュアクリスタルは純粋な魔力ブースターとして使える。
紅玉や宝玉は最初から魔力が充電されている。ただし、アクが強すぎて単体では使えない。しかし、触媒としては超一級品だった。
ただ、眼球だけは人に扱えるものではないと思ったので、返しておいた。あんなものを持っていたら、いかに凛といえど発狂しかねない。
しかし、更なる疑問が頭に浮かぶ。
「ねぇ、アンタ、生前は何してたの？」
相当の金持ちだとは思うが、品性が感じられない。
「クラス名そのままの狩人だ」
「だとしたら、戦争にでも行けそうな重装備で何を狩っていたのよ？」
ふむ、とハンターは少し考えてから
「主にドラゴンだ。といってもオレの時代では、ドラゴンなどそこら中にいるし、竜殺しなど珍しくもない。オレは五千匹程殺したが、減った気配はなかったな」
「五千匹ッ？！」
ハンターの言っていることは、異常だった。
通常、ドラゴンを一匹でも殺せば、英雄と呼ばれる。それを五千匹も殺しているとなると、凛の知る他の龍殺しの英雄とは、正しく桁が違う。
「あぁ。だが、現代における龍である古龍は、その内、千五百匹ぐらいだな。
後のは、空を飛ぶ体長十メートルのライオンみたいなモンだ」
五千年後の世界は、一体どうなっているのだろうか？
しかし、話をすればするほど、このサーヴァントが当たりと思えてくる。払った代償に見合った対価と言える。
そこで凛は、ふと思い出した。
「そういえば、何でわたしの家が全壊してるワケ？」

遠坂に限らず、魔術師の家は、一種の魔術的な要塞と言える。何をどうしたら、その要塞を一瞬で破壊できるのだろうか？
「あぁ、それは、召還された時に一瞬、宝具の空間が実体化したからだろう。
マスターを押し潰す訳にもいかねぇから、座標を上にずらしたらこうなった」
なるほど、理由は解った。魔術師の家は、魔術的な干渉には強いが、物理的な衝撃にはそれほど強くない。しかし、今は冬だ。家が無いのはマズい。なので、
「それじゃハンター、最初の仕事だけど、せめて寝る場所を作りなさい。言っておくけど、これはマスターとしての命令よ」
ハンターは「こんなのサーヴァントの仕事じゃねぇ」と言いつつも、その動作は淀みなく、手慣れている。十分程で遠坂邸だったものと、宝具内のアイテムでテントを作った。令呪は効いているようだ。
とりあえず、夜も遅いし、疲れたので今日は休むことにした。ハンターはテントの外で見張りだ。

――こうして、遠坂凛とハンターの聖杯戦争は始まった。

第二話『忍び寄る気配』（前書き）

一話の長さを長くし過ぎると、誤字・脱字が多くなりそうなので、
一話の長さはこれくらいでいきたいと思います。
誤字・脱字を見つけた方はお知らせ下さい。

第二話『忍び寄る気配』

翌日――
朝、凛が起きると、そこは見慣れた自分の部屋ではなく、テントの中だった。
ボーっとしながら、テントから出ると住み慣れた家の残骸が転がっていた。
「遅いお目覚めだな、マスター？」
と、黒い鎧の男が歩み寄って来る。それで思い出した。召喚の余波で家がなくなり、テントで寝ていたのだ。
幸い、結界の基部は地下にあり無事なので騒ぎにはならないだろう。しかし、当然目覚ましなどなかったので、
「今、何時？」
という問いには、
「日の出が四時間前ってところだ」
という答えが返ってきた。だとすると、大遅刻だし、今日は学校をサボって、ハンターに街を案内しよう。
「ハンター、今日は街を案内するわ」
「あぁ、フィールドの把握は必要だな。だが、一つ大事なことを忘れてねぇか？」
「大事なことって何よ？」
「名前だよ。な・ま・え。それとも、オレの名前なんか聞く価値ねぇし、オレなんかに名乗る名前はねぇとでも？」
「ーーッ！　そんなことないわよ。わたしは遠坂凛よ。アンタは？」
確かに、名前を教えるのは、人付き合いの基本だ。まあ、相手は元人間だが……。
「凛、か。オレはカプコンだ。だが、この名前は多くてな。ハンターの方が呼ばれ慣れてる」
名前を呼び捨てにされた凛だが、不思議と嫌悪感はない。

「じゃあ、呼び方は、ハンターで良いわね。他の参加者を混乱させられるでしょうし」
あぁ、と頷くとハンターは宝具からこんがり焼けた肉と数種類の薬品を取り出し、口（？）に放り込み始めた。一体どうやったら、フルフェイス型の兜を被ったまま食事できるのだろうか？
「何の薬品？」
「凛も飲むか？」
と、緑色（回復薬グレート）・水色（栄養剤グレート）・黄色（強走薬グレート）・茶色（硬化薬グレート）の液体が入った四つのビンを渡してきた。
ハンターの説明によると、緑は傷を治し、水色は体力上昇、黄色は一定時間疲れなくなり、茶色は肌が岩石のごとく硬質化するらしい。
とりあえず、茶色は返して、水色の液体を飲んでみた。少し甘いくらいで、味はあまりしない。例えるならば、薄目のスポーツドリンクだろうか。そして、効果はすぐに表れ、昨日の疲れがなくなった。
「ところで、コレの材料って何？」
現代に存在する材料なら、今度、自分で作ってみようと思う凛だったが……、
「ハチミツとキノコの乾燥粉末とすり潰した虫だ」
凛の頭は一瞬フリーズしたが、強引に再起動をかける。
「……ええと、ハンター？　その虫って？」
「あぁ、不死虫っていう“生命力の強い”ヤツだ。
そういえば、凛の家の残骸にもよく似たのがいたな。色は“黒”っぽかったが……。
まぁ、その不死虫を生きたまま、すり潰して――」
ハンターの説明は、途中で止まった。凛がハンターにガンドをブチこんだからだ。
――ガンドとは、指差した相手を病気にする魔術である。が、凛

のそれは、『フィンの一撃』と呼ばれる域に達しており、銃弾という表現の方が正しいだろう。
ガンドは鎧に弾かれたが、呪いは受けたようで、頭から紫色の泡が出ている。
ハンターは青い薬品を取り出し飲む、すると泡が出なくなり、解呪される。
どうやら、物理防御は高いものの、呪いとかには弱いらしい。そんなことを考えていると、
「何しやがる！？　凛！！」
「それは、こっちのセリフよ！　平然とゴキ○リ（※自主規制）入りのものを飲ませないで！！」
というか、あの忌まわしきG（※自主規制です）は、遠坂邸の結界さえ突破するらしい。
「凛は、そのゴキブ○（※自主規制だってば）が駄目なのか？」
「当たり前でしょ！　一応聞くけど、緑と黄色には何が入ってるのよ？」
その質問に対するハンターの答えから黄色の薬品も返した。

一悶着あったが、全壊した家から使えるものを回収し、出かける。ちなみに、大師父の宝石箱を始めとした持ち歩けないものは、ハンターに地下の工房へ運ばせた。
霊体化しているハンターは、街が珍しいのか、色々と質問してきた。
ただし街の把握には真剣で、細かい所までチェックしていた。曰わく、フィールドの把握はハンターとして生きていくには大事なことらしい。

日も暮れて、街が闇に覆われた頃、凛とハンターは新都のビルの屋上にいた。
凛が屋上の縁に立ち、下を眺めていると、視線を感じた。その視

線は、一人の少年からのものだった。
凛の視力では、はっきりとは見えないが、特徴的な“赤毛”から、誰であるかはわかった。そうしていると、ハンターが横に来た。
『どうした、凛？　何かあるのか？』
そう言って、凛と同じ方向を見る。
『何だ？　男か、“マスター”。ああいうのが趣味なのか？』
どうやら、ハンターには、はっきり見えるらしい。
「ち、違うわよ！　ただ、知り合いってだけ！　いいから、次行くわよ」
顔は見えないが、間違いなくニヤニヤしているハンターにそう言って、凛とハンターはビルから離れた。

その帰り道、坂を上っていると、その先に見知った顔を見つけた凛は、横路に隠れた。
『今度は何やってんだ？　凛』
「黙ってて！　あそこにいるのも知り合いなのよ。今日はちょっと顔を合わせたくないの」
道には、見知った顔の後輩と知らない外国人がいた。ちなみに、顔を合わせにくい理由は、今日の無断欠席にあるのだが。
『知り合いってどっちだ？　凛』
「女の子の方よ。“金髪の男”は知らない」
そこで、ふと気になった。
「……ハンター。あいつ、人間？」
『さあな。実体はあるようだが……』
「そうよね。マスターでもないし、サーヴァントの筈ないか」
これほど近くにいれば、マスター同士感知できる筈だ。故に、そう結論を出すと、二人がいなくなってから、再び坂を上がっていった。

そうして帰って来ると、もう夜の十時半だった。そして、テント

での二泊目だ。
結界が生きている以上、しばらくはテント生活だ。銭湯が近くにないので、かなり不便だが、仕方ない。
そして、明日のために遠坂凛は眠りについた。

――翌日
今後の方針として「学校には通い続ける」と言うとハンターは「学校って何だ？」
とか言いやがった。サーヴァントは、召還時に聖杯から最低限の知識は与えられる筈だが、その中に学校の情報が含まれていなかったか、忘れているのか。
実は、ハンターの時代でも王立学術院という機関があるのだが、それは研究機関であり教育機関ではない。どちらにしろ、ハンターの記憶からはすっぽ抜けていたが。
しかし、説明するのも面倒なので、連れて行って、自分の目で見てもらうことにする。どちらにしろ、外出時には、護衛をさせるつもりだったし。

学校に着くと、驚きで立ち尽くした。完全ではないようだが、結界が張られていたのだ。
『凛。どうする？』
ハンターも嫌な気配を感じ取ったのか、聞いてくる。
しかし、答えなど、考えるまでもない。
「そんなの決まってるじゃない。問答無用でぶっ倒すだけよ」
『それでこそオレのマスターだ』
そう言ってハンターは笑った。
余談だが、授業を聞いているハンターの様子は、念仏を聞かされている悪霊のようだった。

――放課後

結界の下調べを終えた頃には、時刻は八時になっていた。
最近は物騒な事件が多いので、学校に残っていられる門限は六時となっている。今の学校には自分達以外には誰も残っていない筈だ。
調べた結果、結界の起点は屋上にあった。
しかし、結界は想像以上に強固で凶悪だった。一時的な無効化は可能だが、根本的な消去は不可能だ。ハンターも、この結界について説明すると嫌悪感を露わにして
『悪趣味だな、この結界を張った野郎は……！』
と毒づいていた。
とりあえず、一時的とはいえ無効化しておくに越したことはない。
結界の起点である呪刻に左手をつけて、左腕に刻まれた魔術刻印を使い、結界を無効化する。だが、
「なんだよ。消しちまうのか、もったいねえ」
――突然、知らない男の声が響いた。
「――ッ！！」
とっさに振り返ると、給水塔の上に青い獣が佇んでいた。
「……これ、貴方の仕業？」
まずは確認だ。しかし、
「いいや。小細工を弄するのは魔術師の役割だ。
オレ達はただ命じられたまま戦うのみ。だろう、そこの鎧野郎」
ハンターが見えているということは、
「やっぱり、サーヴァント……！」
「そうとも。で、それが判るお嬢ちゃんは、オレの敵ってコトでいいのかな？」
そう言いながら右腕を上げる。何も握っていなかった右手には、何時の間にか、紅い槍があった。
そして、青い旋風が紅い死を携えて迫って来る……！
判断は一瞬。魔術を使い屋上のフェンスを飛び越え、校庭に落下していく。
「ハンター、着地任せた……！」

『人使いの荒いこって……！」
着地をハンターに任せ、着地と同時に走り出す。ある程度距離をとってから振り返ると、それほど離れていない所に青い獣が立っていた。
「ハンター！」
後ろに引きつつ、自らの相棒に呼びかける。
それに応え、ハンターは凛の前に出て、実体化する。
そうして、曇天の下に、黒い狩人と青い獣は対峙した。

第二話『忍び寄る気配』（後書き）

本ＳＳの独自設定では、不死虫は、ゴ〇ブリの進化したものということになりました。

次回タイトルは
『３本の角』でいきたいと思います。

第三話『3本の角』（前書き）

武器解説は後書きにて。

第三話『3本の角』

対峙する黒い狩人と青い獣。舞台は穂群原学園のグラウンド。日中は多くの生徒の姿が見えるそこに今いるのは、三人だけだ。
両者の間合いは五メートル程。青い獣が持つのは紅い槍、つまり
「ランサーのサーヴァント……」
ランサーのクラスは、その名の通り槍使いであり、高い敏捷性を誇る。
「如何にも。そういうアンタのサーヴァントは……何だ？格好からしてライダーかセイバーだろうが、魔力のカケラも感じねえ」
マスターである凛でさえ、混乱したのだ。ランサーにも理解はできないだろう。

ランサーは相手を図りかねる。セイバーやライダー、アーチャーが持っている筈の対魔力がなく、あれほど重装備のアサシンは有り得ない。かといって、キャスターである筈もなく、理性がある以上はバーサーカーでもない。
なにより不可解なのは、その鎧だ。その鎧は、“何の神秘も感じさせない竜の甲殻”で出来ていた。
しかし、そんなことを気にしていても仕方ない。
「まあいい、エモノを出せよ。それぐらいは待ってやる」
ランサーは、それで相手のクラスも分かると思っていた。
「それじゃあ、お言葉に甘えさせて貰おうか」
ハンターが応える。その声は、心なしか弾んでいた。
そして、ハンターが取り出したのは、巨大な盾と凄まじい存在感を放つ、塔のような“槍”『ロストバベル』だった。
「テメェ……！！」
ランサーから溢れるのは、殺気だ。当然だろう、ランサーに槍で

挑もうというのだ。
　しかし、ハンターは気にした風もなく、
「じゃあ、オレから行かせて貰おうか！」
　そう言って、地面を踏み砕き、残像すら残して、ランサーに突っ込んで行く。
　それは、人間では反応すらできぬ速度。恐らく、戦車すら貫通するだろう突撃だ。
　しかし、ランサーはそれをかわし、逆に神速の一撃をカウンターとして叩き込む。心臓に向かうその一撃をハンターは盾で防ぐ。
　ハンターの槍はかわされ、ランサーの槍は盾の表面を削るのみ。その切っ先が敵を捉えぬまま、それを十数合繰り返していると、
「ハハッ、楽しいなぁ、おい！」
　殺し合いの最中だというのに、突然、ハンターが笑い出した。
「何笑ってやがるっ！！」
　ランサーの怒りと共に放たれた、これまでで最速の一撃を盾で受け止め、その勢いを利用して後退するハンター。
「なぁに、こんなに楽しい戦いは久しぶりでな。それに、人との戦いは慣れてないからな」
　そう言いながら、盾を戻し、幾何学的に線が入った銀色の槍のようなもの――『ジェネシス』を取り出す。
　ランサーには、それが槍のようで、槍ではないことは判ったが、何かは判らなかった。しかし、そうなると、相手はランサーですらない。
「おい、オマエ。クラスは何だ？」
「オレはハンターのサーヴァントだ。ランサー！！」
　そうして、ハンターは右手に『ジェネシス』、左手に『ロストバベル』を持って、再びの突撃を敢行する。
　未知のクラスに困惑するランサーだが、疑問を捨て置き、現状を確認する。
　手数は二倍になったが、盾（防御）を捨てたということは、初撃

をかわせば、ランサーの槍からハンターは逃れられない。
迫る槍の一撃を左にかわし、頭を狙って来た槍のようなものを、後ろに引いて回避する。
これで、二撃を凌いだ。今度はこちらの番だ。
令呪で命令されている為、致命傷は与えられないが、手傷は負わせられる。
そう、ハンターの攻撃が“二撃”で終われば。
「ハッ！！」
ハンターの声と共に、ランサーの視界が爆発した。

ハンターは、『ロストバベル』による初撃を敢えて左にずらし、ランサーを自身の右側に誘導した。そして、『ジェネシス』は『ロストバベル』より短い。故に、ランサーは後ろへの回避を選択した。
しかし、『ジェネシス』はガンランスであり、ランスに爆圧による砲撃機能を加えたものだ。故に、その射程は見た目以上に長い。
純粋な槍使いであるランサーには、槍に爆薬を仕込むなど考えられなかった為に反応が遅れた。

ランサーの視界がホワイトアウトから回復すると、ハンターが少し離れた場所から話しかけてくる。
「今のを避けやがるか。さっすが、ランサーってところか」
ランサーは最速の英霊だ。爆発の影響圏からは、逃れていた。しかし、一瞬とはいえ視覚は死んだ。だが、ハンターはその隙を攻めなかった。
「どういうつもりだ……？」
「なぁに、久しぶりに楽しい相手なのに、宝具も見ずに終わっちゃあ、詰まんねぇだろ」
その言葉にランサーも笑う。相手が戦いを楽しんでいるのに、自分は楽しまないのは損だ。
「……ならば食らうか、我が必殺の一撃を」

「楽しいのを、期待してるぜ？」
その言葉を合図に、周囲の空気が変わった。

凛は思った。ハンターは強い。ランサーと槍で渡り合い、奇襲に近いとはいえ、ランサー相手に致命的な隙を作り出した。
しかし、性格に問題がある。どう見ても、戦闘バカだ。まあ、ランサーも同類のようだが……。
そんなことを考えていると、ランサーが宝具使用の準備に入り、その宝具である紅い槍が周囲のマナを喰らい尽くす。
ハンターは二つの武器を構えたまま、待っている。
そして、ランサーはハンターの目前に駆け、槍を繰り出す。その軌道はハンターに掠りもせず、地面に突き刺さるものだ。
対するハンターは、正確に迎撃するが……！それよりも早く、
「刺し穿つ（ゲイ）……死棘の槍（ボルク）……！！」
ランサーの宝具が発動した。地面に向かっていた筈の紅い槍が因果をねじ曲げ、脇にある装甲の隙間から心臓を貫く。
心臓を貫かれたハンターの手から武器が落ち、
「ハハッ！本当に久しぶりだ。致命傷を受けたのは。戦いってのは、こうでなくっちゃいけねぇ」
興奮した様子で、楽しそうに笑いやがった。
「なっ！？」
ランサーが驚いているが、それも当然だろう。その槍は、確かに心臓を貫いたのだから。
ハンターは、保有技能『戦闘続行：A』により、二度までの致命傷を無効化する。
ランサーも、仕切り直しとして、一度大きく距離をとる。
と、その時ランサーの耳が物音を捉えた。
「ッ誰だ……！！」
何者かが、校舎の陰へと走り去っていく。その後ろ姿は、間違いなく学生服だった。

すると、急にランサーが顔をしかめて、
「悪いな。マスターの命令だ。勝負は預けさせてもらう」
走り去った何者かを追って行った。凛もハンターを先行させ、後を追う。

その先には、床に倒れた生徒と、立ち尽くしているハンターの姿があった。
生徒はランサーに目撃者として、襲われたのだ。神秘の隠匿は全ての魔術師に課せられた唯一のルールだ。そして、『死人に口なし』と言われるように、これが最も確実な口封じの手段なのは確かだ。
まだ息はあるが、致命傷だろう。ハンターの薬品も、飲む力さえない相手には無意味だ。
とにかく、ハンターにはランサーを追わせる。
「“マスター”、どうするかは“自由”だが、痕跡は残すなよ。魔術ってのは隠匿するモノなんだろう？」
行きがけに、ハンターはそんなことを言っていた。
そして、残された凛は襲われた生徒の顔を確認して、息を飲んだ。
「……な、んで？」
その生徒は、凛にとってはただの不幸な他人の筈だった。
「……そう。そういうことなワケね、ハンター」　しかし、顔を見て、ハンターが言った“自由”という言葉の意味がわかった。
凛は少し迷ったものの、結局はその少年を助けることにした。

そして一命はとりとめたが、気絶したままの少年を置いて帰宅する。
父の形見の宝石を使ってしまったが、処置は上手くいったので、少年が目を覚ます前に退散することにしたのだ。もちろん、痕跡など残していない。
少なくとも、ランサーの真名は判ったのだ。それだけでも、十分な戦果だ。ランサーは、アイルランドの大英雄――『クー・フーリ

ン』だ。
形見の宝石を片手で弄りながら、対ランサーの作戦を考えていると、ハンターが帰ってきた。
「お帰りなさい。成果はどう？」
「ダメだ。速さじゃあ、ランサーには、かなわねぇ。橋向こうだとは思うがな」
まあ、これは仕方ない。最速の名は伊達ではないということだろう。
「そう。ま、簡単にはいかないわね」
「ところで、凛。目撃者はどうした？」
そこで思い至る。
「助けて、置いてきた……」
自分のミスに……。ハンターもそう思ったようで、
「オレだったら、逃がした獲物は、何処までも追いかけて――狩るぜ？」
「……！行くわよ。ハンター！！」
そうして、凛とハンターは、少年の家に向かった。

第三話『3本の角』（後書き）

以下は、適当に調べた情報と妄想設定ですので、あまり信用しないで下さい。

ロストバベル

…バベルについては、旧約聖書の『創世記』に登場する巨大な塔。神の門を意味する。
建てられたのは、ギルガメッシュが治めていた国と同じ土地だが、時代的には、バベルが後。

ＭＨでは、無属性の槍。伝説の塔の名を冠する究極の豪鉄槍。

宝具としては、
ランク：Ｂ＋
種別：対人宝具
レンジ：２～４
最大補足：１人

武器としての精度は高いが、僅かに対神武装としての特性があるのみで、特殊な効果は無い。

ジェネシス

…『創世記』のこと。
語源は、誕生・創世・開始・始まり・原因・根源など。

ＭＨでは、無属性のガンランス。
槍身が回転する。
発掘された古代の槍を再現したものらしい。
形状はギルガメッシュの『乖離剣エア』に似ていると言えなくもない。
バベルの記述も併せて考えると、意味深かも。

宝具としては、
ランク：Ｂ＋
種別：対軍宝具
レンジ：２～１０
最大補足：２０人

以上の数値は、竜撃砲使用時のもの。ただし、使用者への反動を無視した改造により、全砲撃の威力が上昇している。
その代償として、竜撃砲を使用すると壊れる。

第四話『真夜中の謁見』（前書き）

『狩人の性』は

ドラゴン以外で

筋力：A＋
耐久：A＋
敏捷：C＋

ドラゴンなら

筋力：A＋＋
耐久：A＋＋
敏捷：B

っていう感じで。魔力・幸運・宝具のパラメーターは変動しません。

武器解説は、後書きで。

第四話『真夜中の謁見』

――午前零時。
凛とハンターは、助けた少年（衛宮士郎）の家に辿り着いた。
「……いる。ランサー（さっき）のサーヴァント！」
気配を探るまでもなく、ランサーがいるのは明らかだった。このままでは、士郎は再び殺されるだろう。
だから、ハンターに塀を飛び越えて突入させようとして――
衛宮の屋敷から迸った白光と、サーヴァントが実体化する気配に思考が停止した。
そして、ランサーが逃げるように跳び去って行く。これは、つまり、
「ねえ、ハンター。これって、何の皮肉？」
助けた相手（衛宮士郎）が、敵になるということだ。
「……さぁな。だが、これで七人だ。本格的に開戦って訳だろう？凛」
そんなことを話していると、新たに現れたサーヴァントが塀を飛び越え、ハンターに襲いかかった。

ハンターは、その一撃を籠手で防ぐが、籠手には亀裂が走る。後一撃でも受ければ、籠手は砕け散るだろう。
見た目は、青いドレスに銀の鎧を纏った、凛よりも小柄な金髪の少女だ。しかし、見た目と中身が一致しない存在らしい。
「……見えない剣か。つまり、オマエはセイバーって訳だ」
今の一撃で相手の得物を見切ったハンターが相手のクラスを言い当てつつ、自らの武器として“不可視の剣”『ファントムミラージュ』を取り出す。
凛は、その剣から強力な魔力を感じた。その魔力が作用している

のか、見えないだけでなく、気配も朧気だ。

しかし、セイバーもそんなものには惑わされず、その構えからハンターの武器を見破る。

「剣！？　……どういうつもりだ？」

しかし、自らこちらの土俵に上がって来る相手の意図を計りきれずに疑問をぶつけるが、

「なぁに、同じ武器なら、お互いに実力が判るってもんだろぉ！！？」

そう言って、ハンターが突進する。

ハンターの一撃を、自らの剣で受け流すセイバー。そうして、剣戟が始まった。

両者の間の空間は、斬撃の嵐と化した。

既に両者の剣は、音速を超え、水蒸気爆発を纏って、空間に白線を描いていく。そうして描いた白線が消えないうちに、新たな白線を伴った斬撃が繰り返され、空間を白線で埋め尽くしていく。

セイバーの剣が神風なら、ハンターの剣は暴風だった。

常人ならば、知覚すら出来ず、防御も回避も出来ぬ攻撃を、セイバーはその未来予知に近い直感と魔力放出で凌いでいく。

ハンターも、最初の一撃で測った剣幅とセイバーの動きから、剣筋を予測し、確実に対処している。

まるで、事前に打ち合わせたように、演舞のように、何時までも続きそうな戦い。

だが、セイバーは目の前の得体の知れないサーヴァントから強烈な脅威を感じていた。自身の龍の因子が悲鳴をあげているのだ。

そして、それを証明するように、セイバーは徐々に圧され始める。

ハンターの剣には、技術などあまり無い。しかし、それを補えるだけの、身体能力と経験がある。

加えて、ハンターの身体能力は保有技能『狩人の性』によって上

昇している。セイバーも、『魔力放出』で能力を向上させているようだが、ハンターの力には及ばない。
今のハンターに肉弾戦で勝てるのは、バーサーカーぐらいのものだろう。
打ち合うこと数十合、一際高い音と共に、セイバーの剣が弾かれる。
それを見逃す筈もなく、ハンターの剣がセイバーの首筋に迫り――、突然停止した。
「チィ……！」
ハンターが剣を宝具に戻しつつ、後退する。
「どういうつもりだ！？」
「何やってんのよ？！　ハンター」
セイバーと凛からの疑問に、
「セイバーは手負いだ。そんなヤツと戦っても、詰まらねぇ」
セイバーはランサーと戦い、手傷を負っていたらしい。
しかし、これは凛にとってはチャンスだ。今なら確実にセイバーを倒し、早々に士郎を聖杯戦争からリタイアさせられる。
ハンターには、令呪を使うまでもなく命令を下せば良い。絶対服従の命令は効いている筈だ。と、そこへ
「セイバーッ！」
士郎が走って来て、あろうことかセイバーの前に立ちふさがりやがった。
「なっ？！　シロウ、何を！？」
セイバーの疑問も、もっともだ。サーヴァントを庇うマスターなど、聞いたことがない。
「何のつもり？　衛宮くん」
とびっきりの猫かぶりスマイルを士郎に向ける凛。目が笑ってないのは、目を弓にして細目にすることでカバーする。
「そ、それはこっちの台詞だ！　遠坂こそ、何をやってるんだ？！」
そこで、凛は士郎の態度に違和感を感じた。その違和感を確かめ

る。
「衛宮くん。聖杯戦争って知ってる？」
「セイハイ戦争？　セイハイってあの聖杯か？」
「……そう。納得いったわ。ようするにそういうコトなワケね、貴方」
凛は、興味深げに腕を組んで士郎を見ていたハンターに
「ハンター、悪いけどしばらく霊体になってなさい。このバカに現状を思い知らせてやらないと気が済まないわ」
「はぁ？　何でオレが消えなきゃなんねぇ――」
ハンターは抗議しようとしたが、最後まで言えずに霊体化させられた。正に絶対服従だ。
「アンタがいたらセイバーだって剣を納められないでしょ」
そう言って、凛は衛宮邸に入っていった。場の主導権は完全に凛が握っているようで、士郎とセイバーも後に続く。

そうして、衛宮邸で凛による聖杯戦争の説明が行われた。ハンターは外で見張りだ。
セイバーはやはり最優のサーヴァントだった。相性からして、ハンターには不利だろう。しかし何より、性格が良い。ハンターには無い品性を感じた。
その後、凛の説明に納得しない士郎を納得させる為、聖杯戦争の監督役――言峰綺礼がいる新都の教会に行くことになった。

セイバーとハンターは中に入らずに教会前でマスターを待っていた。
ハンターは霊体化したままだったが、士郎と凛が教会に入って二分程経った頃、セイバーの前に実体化した。
壊れた籠手は、予備の物に換えてある。壊れた方は現在修復中だが、半日もあれば直るだろう。
「何の用ですか？　そもそも、貴方のクラスは何なのですか？」

聖杯戦争においては、真名だけでなくクラスも隠した方が良い。
ハンターという呼称もクラスを隠す為のものだと思っていたのだが、
「オレはハンターのサーヴァントだ、セイバー。
なぁに、マスターの目が無いうちに渡したいモノがあってな」
そう言って、セイバーに水色の液体が入った小瓶を差し出す。
セイバーは聞き慣れないクラスの存在に困惑しながらも、小瓶を受け取る。
「これは？」
飲め、ということだろうが、得体の知れないものを飲む程セイバーは愚かではない。
「栄養剤グレートだ。効果は、まぁ、体力が増える」
セイバーは一瞬疑うが、ハンターが自分の首を落とせたのに、途中で剣を止めたことを思い出し、飲むことにした。
すると、消化や吸収の時間もかけずに一瞬で変化が表れた。ランサーに受けた傷はそのままなのだが、体調が全快したのだ。
その即効性は、逆にヤバい薬ではないかと思う程だ。
「これは……！　ハンター、貴方は一体？」
「なぁに、この薬は人間の潜在能力を引き出すだけだ。それから、オレはただの狩人だ……」
そう言って、ハンターは再び霊体化した。

そして、教会で説明を受けた士郎は、聖杯戦争に参加することを決めたようだった。

――その帰り道
そこには、白い少女と黒い巨人が立っていた……。

第四話『真夜中の謁見』（後書き）

今回の使用武器は、『ファントムミラージュ』です。

ファントムミラージュ

…霞龍素材の太刀で、意味は亡霊、蜃気楼です。

ＭＨでは刀身しか消えませんが、このＳＳでは、全体が不可視です。また、ハンターは練気ゲージを溜めなくても任意で変形可能。（この場合は透明化）

形状は、手前の直線部分の長いショーテル。刀身は薄い黄色から赤黒へのグラデーション。その他は紫。

宝具としては、

ランク：Ａ
種別：対人宝具
レンジ：１～３
最大補足：１人

武器としては、光学迷彩と気配遮断の特性を持ち、隠蔽能力に関しては、セイバーの『風王結界（インビジブル・エア）』よりも上。
また、『約束された勝利の剣（エクスカリバー）』と打ち合っても刃こぼれしない程度には武器としての精度も高い。

次回タイトルは、『絶対強者』でいきたいです。
あまりにそのままだとは思いますが。

第五話『絶対強者』（前書き）

ガンナー装備時は、

耐久：B
敏捷：C＋

『狩人の性（弱）』発動

耐久：B＋
敏捷：B

『狩人の性（強）』発動

耐久：A－
敏捷：B＋

になります。他のパラメーターは、剣士と一緒です。

後書きで、今回の使用装備と今更ですがアカムト（剣士）の解説してます。

第五話『絶対強者』

教会からの帰り道、凛が士郎に「明日からは敵同士だ」と告げて、新都のマスターを捜しに行こうとした時だった。

「……ねえ、お話は終わり？」

その声がした坂の上に四人が振り返る。そこには、白い少女と黒い巨人が立っていた……。

その巨人を見て、思わず凛が呟く、

「……バーサーカー」

それは、凛の見立て通りの狂戦士だった。理性など感じさせず、殺意のみを撒き散らすバケモノ。

その隣に立つには、あまりに不釣り合いな白い少女が口を開く

「こんばんはお兄ちゃん。こうして会うのは二度目だね」

今の発言に気になる部分もあったが、今はそれどころではない。凛は、白い少女の背後に立つ巨人を観察する。

「驚いた。単純な能力だけならセイバー以上じゃない、アレ」

肉弾戦の能力はハンターに匹敵し、強い魔力まで備えている。

仮に、ハンターとバーサーカーが、それぞれ同じ力量の魔術師の援護を受けながら戦ったとしたら、ほぼ確実にバーサーカーが勝利するだろう。

「ハンター、アレ相手に接近戦はリスクが大きすぎる。ここは距離をとって戦うべきよ」

霊体化しているハンターに指示を出す。

『了解だ、凛。しかし、守りはどうする？　凛じゃあ、アレが突っ込んで来たらどうにもならねぇだろ？』

「こっちは三人よ。凌ぐだけならなんとでもなるわ」

『そうか。なら、お守りは必要ないようだな』

そう言って、凛の前に控えていた気配は、一瞬にして何処かに消えた。

「……衛宮くん。逃げるか戦うかは貴方の自由よ。けど、出来るならなんとか逃げなさい」
これは、本人の安全の為でもあるが、それよりもセイバーに余計な負担をかけない為だ。
しかし、凛はまだ知らない。衛宮士郎には『誰かを放って逃げる』という選択肢が最初からないことを。
「相談は済んだ？　なら、始めちゃっていい？」
少女は行儀良く、この場に不釣り合いなお辞儀をして、
「はじめまして、リン。わたしはイリヤ。イリヤスフィール・フォン・アインツベルンって言えばわかるでしょ？」
「アインツベルン……！」
アインツベルン――御三家の中心といえる存在であり、聖杯という狂気に取り憑かれた一族でもある。
凛がその名前に動揺しているのを見て、少女――イリヤは嬉しそうに笑みをこぼし、
「じゃあ殺すね。やっちゃえ、バーサーカー」
無邪気に、背後の怪物に命令した。
「■■■■■■ーー！！」
命令に応えて、巨体が跳ぶ。坂と重力を利用し、十数メートルという距離を一気に詰める。
「シロウ、下がって……！」
セイバーが前に出て、バーサーカーを迎撃する。
激突する剣と剣。否、バーサーカーの武器は、剣と呼ぶのもおこがましい巨大な岩塊だった。
セイバーは、バーサーカーの剣に圧されながらも、一歩も譲らない。あの小さな体にどれだけの魔力が籠められているのだろうか。
凛がその光景に半ば見とれていると、
『“マスター”、オレは見てるだけなのか？』
ハンターが念話で指示を仰いできた。その声はどこか不満気だ。
その理由は、戦いに参加できていないことと、凛がセイバーに見と

れていたからなのだが……。
「わかってる！　ハンター、セイバーを援護して！」
さっきからセイバーはバーサーカーを何度か斬りつけている。しかし、如何なる加護が働いているのか、バーサーカーには傷一つ付いていない。
このままではいずれ力尽きるだろう。それを黙って見ていられない程度には、凛はお人好しだった。
『了解だ！』
その言葉と同時に矢が放たれる。否、それは最早、矢と呼べる領域にはない。アンチマテリアルライフルのごとき弾丸。それが三連、バーサーカーの頭を狙って放たれる。
それは、一発目でバーサーカーの皮膚を裂き、二発目で頭蓋を砕き、三発目でその中身をスイカのように破裂させた。
三発目に至っては、それだけで止まらずアスファルトに直径二メートル程のクレーターを作っている。
「「「なっ？！」」」
凛とハンター以外の三人が驚きの声をあげる。
バーサーカーが“一度”絶命した。脳漿と血液の霧を頭のあった位置に漂わせ、バラバラになった脳髄と骨片がその足下にぶちまけられている。

イリヤが矢の飛んできた方向を睨みつける。
そこには、白い龍の首で出来た弓『勝利と栄光の勇弓ＩＩ』が浮いていた。
数瞬後にはその弓も消えてマスターである凛以外には、ハンターが何処にいるかもわからなくなる。
ハンターの姿は身に纏った鎧――『トヨタマ真』の付加技能である気配遮断と光学迷彩で隠されていた。
だが弓は見えた、それで三人も納得がいった。龍の口から放たれ

た矢ならば、龍の息吹と同義であり、バーサーカーを殺せるのも道理だ。
しかし、
「■■■■ーー！！！」
絶命した筈のバーサーカーは蘇生した。弾け飛んだ頭の骨・肉・皮・各組織が、まるで時間を巻き戻すかのごとく再生する。
「自動蘇生……！？」
凛が忌々しげに呟く。無限に蘇生する訳はないだろうが、厄介な能力に変わりはない。
ハンターにも似たような技能はあるが、頭がなくなる程の一撃は無効化できない。ハンターが無効化出来るのは、あくまで傷といえる範囲までだ。
再び放たれる三連の弾丸。それらは、バーサーカーの頭に直撃し――、全て弾かれた。
「ッ！？　さっきは効いたのに！」
士郎のその言葉は絶叫に近い。
「あは、バーサーカーに同じ攻撃が通じるわけないじゃない。わたしのバーサーカーはね、ギリシャ最大の英雄なんだから」
イリヤが、自らの狂戦士を誇る。
「……！？　ギリシャ最大の英雄って、まさか――」
凛は聖杯戦争の為に、様々な英雄について調べていた。故に、イリヤの言葉の意味するところがわかった。
「そうよ。そこにいるのはヘラクレスっていう魔物。あなたたち程度が使役できる英雄とは格が違う、最凶の怪物なんだから」
通常、バーサーカーのクラスに選ばれるのは能力が低い英霊なのだが、今回は例外のようだ。
ヘラクレス――半神半人であり、知名度も最高クラスの英雄である。
自動蘇生に加え、一度受けた攻撃への耐性、セイバーの攻撃を無効化していたことからの予測だが、ランクＢ以下の攻撃も無効化す

るという、正に化け物だった。
凛と士郎の反応を見て、イリヤが楽しげに
「……でも、見直したわリン。やるじゃない、アナタのアーチャー。いいわ、戻りなさいバーサーカー。つまらない事は初めに済まそうと思ったけど、少し予定が変わったわ」
イリヤは、ハンターをアーチャーだと勘違いしているらしい。
「……なによ。ここまでやって逃げる気？」
凛のこの言葉は強がりでも何でもない。少なくとも、バーサーカーを殺す手段（武器）はまだまだあるのだ。
「ええ、気が変わったの。セイバーはいらないけど、アナタのアーチャーには興味が湧いたわ。だから、もうしばらくは生かしておいてあげる」
この場で決着を付けないのは、まだ良い。だが、見逃されたことにされるのは、『常に優雅たれ』という遠坂の家訓に反する。故に、
「一つ勘違いしているようね、イリヤスフィール。わたしのサーヴァントはアーチャーじゃない」
その声に応じるようにバーサーカーの前に黒い鎧が現れる。その手に握られているのは、命を刈り取る大鎌『ミラザーゲスパノン』。
黒い鎧――ハンターは、それを振り抜き、バーサーカーの右腕を斬りつけながら後退する。
だが、その程度の傷、バーサーカーにとっては致命傷足り得ない。それどころか、一瞬で治癒するだろうその傷に
「■■■■■ーーー！！！！！」
理性無き狂戦士が、ある筈の無い痛みに吼えた。理由は簡単、腕の傷が治癒しないのだ。
「…ッ！！　どういうこと！？　リン！」
そのイリヤの問いには
「オレはハンターのサーヴァントさ。お嬢ちゃん」
ハンターが答えた。

ハンターが使った大鎌を見た瞬間、士郎にはわかった。
あの大鎌『ミラザーゲスパノン』には、他者を傷付け、所有者を戦いに引きずり込む呪いめいた怨念が宿っていることが。
その怨念の正体を確かめようとして――、士郎の意識は刈り取られた。龍の怨念に人間の精神が耐えられなかったのだ。

同じように、ハンターの大鎌に意識を向けていたセイバーだったが、倒れるシロウに気づいて駆け寄る。
「……！　シロウ？！」
士郎の身を支えるが、その顔は真っ青だった。

そんな中、
「……退くわよ。バーサーカー」
イリヤが苦々しく呟く。セイバーはともかく、ハンターは得体が知れない。これ以上の戦闘はバーサーカーといえどもリスクが大きい。
バーサーカーがイリヤを肩に乗せ、撤退する。
それを見て、ハンターが訊ねる。
「追うか？　凛」
「何の対策もなく戦うべき相手じゃないわ。
それより……衛宮くんの様子がおかしい。何か呪いでも受けたのかも知れない」
そう言って凛が士郎に近づいていくなか、ハンターは自らの大鎌を見て、
「……まさかな」
誰にも聴こえないように、そう呟いた。
それから、凛が士郎を看終わると、
「ハンター、命令よ。衛宮くんを運んで」
そうして、ハンターは士郎を衛宮邸まで運ばされた。

第五話『絶対強者』（後書き）

今回の使用武器は『勝利と栄光の勇弓ＩＩ』と『ミラザーゲスパノン』で、使用防具は『トヨタマ真』と、いつもの『アカムト（剣士）』です。
以下、いつもの勝手な設定など。

勝利と栄光の勇弓ＩＩ

…龍属性の弓で、見た目は祖龍の頭そのもの。

祖龍の魂を宿した神弓で、穢れ無き心で弦を引けば、闇を祓い千の勝利を約束するらしい。

作者の感想だが、名前がＦａｔｅっぽい。

ランク：Ａ＋
種別：対人宝具
レンジ：２～９９
最大補足：３人

ハンターは穢れ無き心を持っていないので（笑）、上記の能力は発揮できない。
それでも、放たれた矢には龍の属性が付与され、弓としても非常に強力である。

ミラザーゲスパノン

…黒龍素材で作られた刃が三つある龍属性の黒い鎌。（分類は太刀）

命を刈り取る大鎌で、この鎌によってつけられた傷は決して癒えないらしい。

ランク：Ａ＋
種別：対人宝具
レンジ：１～３
最大補足：１人

効果は第四次聖杯戦争のランサーの宝具『必滅の黄薔薇（ゲイ・ボウ）』と同じ治癒阻害。
この効果を打ち消すには、以下の方法がある。

一、この宝具を破壊する。

二、ハンターを消滅させる。

三、阻害能力を上回る治癒力を得る。

四、治癒阻害の効果自体を打ち消す。

バーサーカーならば、時間はかかるが四の方法で解除可能。（『十二の試練（ゴッド・ハンド）』の受けた攻撃への耐性の効果で）

トヨタマ真

…霞龍素材のガンナー用防具。
見た目は何とも言い難いが、装飾の色がメインカラーになる。
が、本ＳＳでは完全に透明となる。

ランク：Ａ
種別：対人宝具
レンジ：ー
最大補足：１人

以下、付加技能

『光学迷彩：Ｃ』
…視覚妨害ではなく、実際に透明になる。
ただし、動くとうっすら見える。

『気配遮断：Ｂ』
…相手に視認されない限り、感知されなくなる。
『光学迷彩：Ｃ』との併用により、その隠密能力は真アサシンに匹敵する。

『霞皮の守り：Ａ』
…風・氷属性の攻撃の減衰。
ただし、風属性のカマイタチや氷属性の物理的な衝撃は対象外。

これを見てると真アサシンが可哀想になってくる…。

アカムト（剣士）

…本ＳＳのハンターの基本防具。予備も持っている。
これは、魔力消費が控え目で付加効果の汎用性が高い為。

形状は、トゲトゲした黒い装甲にオレンジのラインが走っているというモノ。

ランク：Ｂ
種別：対人宝具
レンジ：ー
最大補足：１人

付加技能は

『見切り：Ｂ』
…相手の防御の薄い箇所を見抜くことでクリティカル率を上昇させる。

『匠：Ａ』
…近接武器の性能を限界まで引き出し、斬れ味を上昇させる。

今後は独自展開なので、（書く）難易度が上昇していきます…。
大筋としては、全ルートを混ぜた展開になる予定。

第六話『あかいあくまとおれんじのおに』（前書き）

すいません。プロット作るのに手間取って更新遅れました。

妄想設定は後書きで。

第六話『あかいあくまとおれんじのおに』

目の前には黒い龍。
土を焼く者
鉄を溶かす者
水を煮立たす者
風を起こす者
木を薙ぐ者
炎を生み出す者
その者の名はミラボレアス
その者の名は宿命の戦い
その者の名は避けられぬ死

一目見て判った。ソレは死だ。人の身で、最強の幻想種であるソレに挑むことは死を意味する。ソレの前では、人など蟻同然。
ソレの殺意がこちらに向けられる。一瞬で魂まで凍りつき――
「……っ！」
衛宮士郎が目を覚ますと、そこは見慣れた自室だった。窓からは陽が差し込んでいる。
「……夢、……か」
はっきり言って、まだ心臓がバクバクいってる。しかし、所詮は夢だ。気にしていても仕方がないので、起き上がる。
時計が指す時間は昼過ぎ。お腹が空いていたので、食べ物を求めて居間に向かう。
今日は日曜日なので、桜も大河も部活に行っている筈だ。当然、居間には誰も居な――
「おはよう。勝手にあがらせてもらってるわ、衛宮くん」
――くなんかなかった。
「な、え……！？」

遠坂凛が座布団に座ってお茶を飲んでいた。しかも、一番高い茶葉の缶を開けて……。
「遠坂、おまえどうして――」
「待った。その前に昨夜倒れた理由について説明してくれない？ ハンターは自分の鎌がどうとか言ってたけど」
それで思い出した。昨夜、士郎は聖杯戦争に巻き込まれ、その戦いの中でハンターの鎌に宿った龍の怨念に耐えられず、気絶したのだ。
「ああ、俺はハンターの鎌に宿ったモノを見極めようとして、その怨念に耐えられなかった」
「やっぱり。そんなことだろうと思った。いい？ 衛宮くん。貴方は対魔力が低いんだから、気をつけなきゃ駄目よ」
凛の言うことは正しい。正しいのだが……。
「それは分かったけど、俺に助言してもいいのか？ 俺と遠坂は敵同士だって言ってなかったっけ？」
「ふ、ふん。状況が変わったのよ」
それから、凛は現状と今後の事について士郎に話した。学校に結界が張られていること。バーサーカーが残り十以上の命を持っていること。
そしてその対策として、凛と士郎は同盟を組むことになった。期限は、バーサーカーと学校のサーヴァントを倒すまで。
その間は凛が士郎の魔術の腕を見てくれるらしい。そうして、今後の方針が決まった。
「そういえば、衛宮くんとイリヤスフィールって兄妹なの？」
その質問に、士郎はお茶を噴きかけた。ちなみにこのお茶、凛が“衛宮家で一番高い茶葉で”淹れてくれたものである。
「ゲホッ！ そ、そんなはずないだろ。イリヤスフィールとは一回会っただけだ。だいたい、それじゃ俺がアインツベルンの人間ってことになるじゃないか」

「……そう。ま、いいわ。さて、それじゃわたしは戻るけど」
凛は座布団から立ち上がり、帰ろうとする。
「え？　ああ、お疲れさま」
暢気な士郎の言葉に対し、凛は顔をしかめる
「ああ、そうそう。一つ言っておくわ。
同盟は目的が果たされれば解消されるし、わたしと貴方はいずれ戦うことになる。
だから、わたしを人間と思わない方が楽よ」
そう言って凛は帰っていった。

凛が帰ってしばらくしてから、士郎はセイバーのことを思い出した。屋敷を探すと、セイバーは道場にいた。
昨日はまともな話が出来なかったので、お互いに最低限の確認と今後の方針について話す。その中で、凛と同盟を結ぶことになったと言うと、
「凛ですか？　……そうですね、シロウがマスターとして成熟するまで、彼女には教わるものがあるでしょう。
しかし、凛のハンターには注意が必要です。私とハンターでは相性が悪い」
「……？　それってハンターの方がセイバーより強いってことか？」
セイバーが一瞬表情を凍結させ、
「違います！！　あくまでも相性の問題です！」
があー、と怒鳴るセイバー。どうやら、今の発言は、セイバーの逆鱗に触れたらしい。
「分かった！　分かったから。……で、どういうコトなんだ？」
セイバーは、ハァと溜息を吐きながら、
「いいですか？シロウ。私とハンターとキャスターは、三すくみの関係になります」
それはつまり、
「ハンターはキャスターに勝てないってコトか」

「絶対に勝てない訳ではありません。
しかし、ハンターにとっては、バーサーカーよりキャスターの方が手強い筈です」
「じゃあ、セイバーにとってのハンターも似たようなものってコトか」
「否定はしません。宝具を使うことができれば、勝率は上がりますが……」
今のセイバーは、魔力補給が出来ない。そんな状態で最後にハンターと戦ったとしたら、結果は火を見るより明らかだ。
そんなことを話していると、玄関のチャイムが鳴った。
これでも、衛宮の屋敷には敵意のある存在に反応する結界がある。そう言っても付いて来るセイバーと一緒に玄関まで行き、引き戸を開けると、そこには“あかいあくま”と“おれんじのおに”がいた。

そこにいたのは、凛と大きなボストンバックを三個持たされた外国人の男だった。
その外国人は、歳は二十代半ば、銀髪に黒い目、耳にはピアスをしており、服装は橙の長袖シャツに黒いジーンズ、ベルトにはドクロがあしらわれている。
士郎の思考はフリーズするが、聞かなければいけないことがあるので強引に再起動をかける。
「……むむむ？　何しにきたんだ遠坂？」
だが、全く理解できない問題（外国人）は放置する士郎……。
「何って、家に戻って荷物取ってきたんじゃない。今日からこの家に住むんだから当然でしょ」
「悪いな、士郎。召喚の時に凛の家が吹っ飛んじまってよ」
その見知らぬ外国人の声に、士郎は聞き覚えがあった。
「ーーッ！　黙ってなさい！！　ハンター！」
そう言って振り返った凛も停止する。数秒経ってから、
「アンタ、誰？」

外国人は溜息を吐きながら、
「荷物持たせといて、鎧姿で歩かせるつもりだったのか？　凛」
それで気付く、
「アンタ、ハンター？」
凛もハンターの中身は知らなかったらしい。
「オレだって元は人間だ。常に鎧姿じゃねぇ」
当たり前といえば当たり前だが、ハンターも元は人間であり、鎧を脱げないという方がおかしい。ただ、急に普通になりすぎ、対応が追いつかなかっただけだ。

その後、セイバーも含めて部屋が割り振られた。
結果、セイバーは護衛し易いように士郎の隣の部屋。“あくま”と“おに”は別棟の客間を占拠した。
セイバーと違い、ハンターは霊体化できるのに、この家にいる間は何故か実体化し続けるつもりらしい。
ちなみに、現在セイバーは凛が持ってきた服を着ている。その服はセイバーになかなか似合っているのだが、凛の趣味ではないらしい。
それから、何時の間にか、凛は“衛宮くん”ではなく、“士郎”と呼ぶようになっていた。
途中で士郎が凛に家のことを聞くと、凍える笑顔で、
“衛宮くん”。人には忘れたい過去っていうのがあるの。分かるでしょ？」
と言っていたので、触れないことにした。触らぬ神に祟りなし。

しばらくして、士郎は別棟の様子を見に行く。
まず、凛の部屋を見てからハンターの部屋に行くと、ハンターは部屋の中で何か調合していた。
「ハンター、何やってるんだ？」
「いや、昨日使った分の道具を補充しようと思ってな」

見るとハンターはネバネバした草を木の実に巻いている。
「一体何の道具なんだ？」
「追跡用のペイントボールなんだが、ランサーには全然当たらなくてな。かなり使っちまった。士郎も手伝ってくれねぇか？」
「ああ、わかった」
この後、士郎は安請け合いしたことを後悔することになる。木の実を潰してしまい、シミと臭いで上着が一枚オシャカになったからだ。幸い、体についた臭いはシャワーでとれたが。

そして夕食。
士郎が四人分の夕食を用意して始まったものは、決して食事などではなく戦争だった。
士郎の予想の範囲内だったのは、ハンターがよく食べることだけ。予測の範囲外だったのは、ハンターの食べる量とセイバーがハンターと同じぐらい食べるということだ。
セイバーは初めはゆっくり食べていたものの、ハンターの食べる速度を見て同じくらい高速で食べ始めた。その後、五分程で多めに炊いたお米は消え失せた。
士郎は思った。この二人の存在により、衛宮家のエンゲル係数は跳ね上がるだろう、と。

就寝時間、しかし士郎は隣の部屋のセイバーが気になって眠れなかったので、土蔵に逃げ出した。
そして、魔術の鍛錬を開始する。
「同調（トレース）、開始（オン）」
自分独自の呪文を口にして、魔術回路を作り、強化の練習をする。
そうして、夜は更けていった。

第六話『あかいあくまとおれんじのおに』（後書き）

ハンターは髪型レウスレイヤー（後ろにツンツンしてるヤツ）で銀髪、外見年齢は二十代半ば。

以下装備

鷹見のピアス

…半径２ｋｍのこちらに敵意を持つ強者の位置がわかる。サーヴァントには『気配遮断』がない限り確実に反応する。（第四次のアサシンには『気配遮断』がなくても反応しない。）

ランク：Ｃ

付加技能は『自動補足：Ｂ』。効果は上記の通り。Ａになると『気配遮断』があっても、確率で一定時間毎に短時間の補足可能。当然、相手の『気配遮断』のランクが上がるほど確率は下がる。

狩人Ｔシャツ Ｘ（橙）

…長袖に改造済み。普段着。

ランク：Ｃ

付加される技能は、『観察眼：Ｄ』で補足した対象が瀕死かどうかわかる。

ハンターの性格からして、瀕死の相手を見つけても無視する可能性大。

カブラススーツベルト・カブラススーツフット

…普段着。見た目は、ベルトとＧパン。

ランク：Ｄ

以上の組み合わせの場合、耐久：Ｃ－になる。

ちなみに、ペイントボールはランサーの『矢よけの加護』で全弾回避されました。

第七話『道場破り』（前書き）

現在、引っ越し中で更新遅いです。
今週末には、終わるので、少しは更新早くなると思います。

第七話『道場破り』

朝、衛宮士郎は土蔵で目覚めた。何故、土蔵で寝ていたかというと、

「……そうか。昨日、鍛錬して、そのまま眠っちまったんだ」

その鍛錬の結果は失敗だった。ランサーから逃れる時には使えた強化が、昨日の鍛錬では、一度も成功しなかったのだ。

口惜しくはあるが、気にしていても仕方ないので朝食の準備に向かう。

昨日はセイバーとハンターのせいで、まともに食事出来なかった。だから、今日の朝食は多めに作ろうと思っていると、

「……おはよ。朝早いのね、アンタ」

明らかに機嫌の悪そうな凛が居間に入ってきた。

「遠坂……？　どうしたんだ？　目つきが尋常じゃないぞ」

「……気にしないで。朝はいつもこうだから」

そう言って、凛は顔を洗いに洗面所に向かった。

と、玄関の呼び鈴が鳴った。この時間に衛宮邸に来るのは間桐桜だ。

昨日からのゴタゴタで忘れていたが、朝の衛宮邸に桜が来るのは、最早日常の一部である。

しかし、今日はマズい。何しろ、今の衛宮邸には凛がいるのだ。士郎はそのことに気付き、玄関へと走った。

だが、時既に遅し……。玄関では、凛と桜が口論していた。

凛は、桜にしばらく衛宮邸に来ないように言っていた。これは、聖杯戦争に巻き込まないようにするためだ。

だが最終的に、桜は凛を無視して、朝食の準備をしに台所へ向かった。その桜の様子は、いつもの控え目な感じではなく、刺々しかった。

士郎はこれ以上話がこじれないように、セイバーに朝食が終わる

まで、自室で待機するよう頼んでから朝食に向かった。
だが、“何か”忘れてる気がした。その“何か”の正体が分かるのは、約十分後のことである。

朝食が進んでいく。しかし――否、やはりと言うべきか、異常は起こった。その発信源は、障子の向こうの廊下である。
そこから聞こえるのは、言い争う声と、何かを引きずる音だった。
「待ちなさい、ハンター！　私たちの食事は後です」
まず聞こえるのは、誰かを引き止めようとする女性の声。
「うるせぇ、邪魔すんな、セイバー！　オレは何の命令もされてねぇし、士郎の指示に従う義務もない！　オレは先に喰う！！」
続いて聞こえるのは、女性を引きずりながら進む男の声。
「貴方が先に食べたら、私の食べる分がなくなります！」
ちなみに、誰かいるのは、声が筒抜けである上、障子に映った影で丸分かりである。
無言で立ち上がった桜が障子を開けると、そこには、進もうとするハンターとその腰を掴み引き止めようとするセイバーがいた。
「……先輩？」
桜がゆっくりと、士郎へと振り向く。その動作に効果音をつけるとしたら、『ぎぎぎぎ……』だろうか。士郎には桜から黒いオーラ（？）が立ち昇っているように見えた。
更に、
「おはよー。いやー、寝坊しちゃった」
そんな、教師として少し問題のある発言をしながら、藤村大河までやって来た。
そこからは、滅茶苦茶だった。
大河がテーブルをひっくり返し、桜が作った熱々の料理（何故か朝から鍋）が士郎の左腕に直撃。
そして、桜が士郎の左腕を拭いてくれたのだが、何故か肩の関節を極められ、

「痛っ！？　痛い、桜！　左腕がもげる！！？」
その細腕に見合わぬ、万力のような握力は、一体どうなっているのだろうか？
「大丈夫です、先輩。もげはしませんから。……多分」
最後にボソッと付け足された『多分』という言葉。その言葉に、このままではマズいと悟った士郎。
士郎の視界の端では、「いいぞー！！やっちゃえ、桜ちゃん！」とか言ってる虎がいるが無視しよう。だが、この状況を打開できる人物は――いた。
「頼む、遠坂。助けてくれ！」
「……」
だが、何の返事も返ってこない。疑問に思った士郎が凛を見ると、
「……寝てる」
これだけの騒動の中、凛は座ったまま寝ていた。いくら何でも、神経が図太すぎる。
この後、肩を極められたままの士郎がどうにか凛を起こし、起こされて不機嫌な凛をなだめ、桜と大河を説得するには三十分を要した。
ちなみに、この騒動の中、まだテーブルに載っておらず無事だった料理は、何時の間にか無くなっていた……。

なんだかんだで、凛は家が使用不能なので士郎が下宿を勧めたことに、セイバーとハンターは士郎の養父である切嗣の知り合いの兄妹ということになった。

そして、登校。士郎達三人が歩く少し後ろには、霊体化したハンターがいる。大河は弓道部の朝練の為、先に登校した。
校門前では、桜の兄である間桐慎二と揉めたが、慎二は凛からトラウマ級の精神的ダメージを受け撃退された。
『好意』の反対は『無関心』だと言われる。意中の異性に『興味

がない』と言われれば、トラウマになるのも仕方ないかもしれない。
それはさておき、結界があると意識して校門をくぐれば、士郎にも結界の存在が感じ取れた。感覚としては、甘ったるい感じだ。

昼休み、士郎と凛は屋上で作戦会議をしていた。議題は学校の結界を張ったマスターとサーヴァントについて。
凛は、結界の効果と範囲、自分では一時的な無効化は出来ても解呪は出来ないことを話した上で、
「明日、もう一度呪刻を無効化するわ。相手の性格からして、そんなことされたら黙ってられないでしょうから、尻尾ぐらいは掴める筈よ」
「分かった。明日からはセイバーにも学校の近くで待機してもらう。ところで、遠坂はマスターが誰か判っているのか？」
「いいえ。うちの学校には、もう一人魔術師がいるし、魔術回路こそ枯れてるけど魔術師の家系の人間もいるけど、そのどちらからもマスターとしての気配は感じないのよね。多分、両方共マスターじゃないわ」
士郎は学校に四人も魔術関係者がいることに驚いていた。しかし、凛からすれば二年近く同じ学校に通って、他の魔術師に気づかず、気づかれずの士郎の方が異常なのだが。
とにかく、今後の方針は決まった。要は、ちょっかいを出して相手の方から出てくるように仕向ける、ということだ。

余談だが、昨日から学校ではある話題が広まっていた。一昨日の夜、深山町で異臭騒ぎがあったのだ。異臭を放つピンク色のナニカが、ほぼ直線上に三十個ほど見つかったらしい。
しかも、その片端が穂群原学園なのだ。生徒たちの興味を煽るには十分だろう。
だが、真相が明らかになることはなかった。この話を聞いた凛が、言峰綺礼に電話をかけたからだ。そして、凛の雷がハンターに落ち

たのは言うまでもない。

学校が終わって、日が暮れる前に士郎は衛宮邸に戻った。これは、凛とセイバーの指示だ。

しばらくすると、凛も帰って来た。その後ろには、米俵（六十キログラム）を背負い、買い物袋（特大）×４を持たされたハンターもいた。

恐らく、総重量は百キログラムを超えているだろう。その状態で汗一つかいていないハンター。流石は英霊と言うべきか。……扱いは完全に凛のパシリだが。

何故こんなことになっているかと言うと、衛宮家の食材は今朝の朝食で底をついていたのだ。だから、士郎は凛に買い出しを頼んでおいた。

ちなみに、士郎は凛に食費の折半を要求したが、

「“衛宮くん”、魔術っていうのは金食い虫なの。出費がかさむようなら、“衛宮くん”に魔術を教える余裕は無くなるかもしれないわね」

と、ニッコリ微笑みながら脅されたので、諦めた。しかし、買い物はしてくれるらしい。（ハンターが全て運ばされているが……）

今日の夕食の当番は凛だ。隣では、ハンターも手伝っている。作らなければならない量は多いが、ハンターは、何処からか出した巨大な中華包丁で食材を高速で切り、これまた何処から出したのか、黒い大鍋で食材を炒めている。

不思議なことに、適当に振り回される大鍋からは一切、具材が零れなかった。

包丁にしても凄まじい斬れ味のモノだ。士郎にはその包丁が、その気になれば鉄さえ斬れるようなモノだとわかったが追求しないことにした。昨日の二の舞はゴメンだ。

凛は味付けと蒸し物の調理をしている。どうやら、夕食は中華ら

しい。

――で、夕食。昨日の夕食のメンバーに桜と大河を加えた六人で食事する。

量は十分な筈だが、セイバーとハンターはやはり凄まじい速さで食べている。（大河も負けず劣らず凄まじいが……）

士郎と凛は、サーヴァントの胃は異空間にでも繋がってるんじゃないか、と結構マジで思った。

食後、突然立ち上がった大河が、ハンターとセイバーに

「じゃあ、道場行こっか？」

とか言い出した。

「っちょ、藤ねえ？　道場って」

二人の実力を垣間見た士郎は止めようとするが、

「だって、ハンターさんとセイバーさんって強いんでしょ？　手合わせしてみたいじゃない」

そう、朝の説明でハンターとセイバーは剣術を習っているということになっている。それで、大河の剣道家の血が騒いだのだろう。

「オレは別にいいぜ？食後の腹ごなしには調度良い」

「私も構いません」

しかも、ハンターとセイバーはヤる気だ。士郎は諦めて見守ることにした。

道場で向かい合っているのは、大河とハンターだ。他の四人も周りにいる。

両者の手には竹刀、大河は正眼に構えているが、ハンターは左手一本で持っているだけで、その腕はだらんと下げられている。

「じゃあ、行くわよ！」

そう言って大河はハンターに襲い掛かる。大河の竹刀がハンターの脳天目掛けて振り降ろされる。その一撃は、常人ならば死の危険

さえあるレベルだが、ハンターは、その一撃を横にした竹刀で防御する。
「なっ？！」
大河が驚きの声を上げる。士郎は思った。防具を着けていない相手に今の一撃を当てるつもりだったのか、と。
尚も大河は打ち込んでいくが、全て防御される。腕に返ってくる感触は、まるで大木に打ち込んでいるかのようだ。
その防御を実現しているのは技術ではなく、圧倒的なまでの身体能力だ。大河はそのことに気づき、距離をとる。しかし、
「今度はオレの番だな？　避けろよ！？」
そう言いつつ、ハンターはジャンプしながら斬りつける。狙いは、大河の初撃と同じ頭だ。その一閃を右に転がることで何とか回避する大河だが……。
ハンターの竹刀は道場の床にぶつかり、床を砕くことを対価に粉砕された。
「「「「……」」」」
セイバーとハンター以外の全員が言葉を失う。ただ、セイバーは何か納得したように頷いているが。
「……脆いな」
ハンターは、残った竹刀の持ち手を見ながらそう呟いていたが、
「も、もう実力は分かったから、試合は終わりにします！」
と、大河が言った。流石にハンターの実力が分かったらしい。セイバーが不満そうな顔をしていたが、大河は気づかないフリをしていた。
それで、その日は解散になった。
ちなみに、今日は桜と大河も衛宮邸に泊まることになった。大河曰わく『見張り』らしい。
そして、今日も士郎は土蔵に向かう。未熟な自分だからこそ、魔

術の鍛錬を休む訳にはいかない。
そうして、夜は更けていった……。

第七話『道場破り』（後書き）

千年包丁G

…調理に使用。
分類は片手剣。巨大な中華包丁と中華鍋の盾からなる。
包丁としては最高峰の一品。
ただ、元々は戦闘用じゃないので、ランク：E。

黒鍋【真好吃】G

…調理に使用。分類はハンマー。
具材は絶対に零れない。例え、逆さまにしても零れない。
『千年包丁G』と同じ理由でランク：E。

竹刀（借り物）

…衛宮邸の道場にあったモノ。当然、宝具ではない。
ジャンプ斬りで破損。

以下、少しネタバレ（嫌な人は見ないで下さい）

アーチャーのサーヴァントは二人出ます。（一人は金ピカ）

第八話『災厄の使者』（前書き）

いろいろあって遅くなりました。
元々、遅筆なので（作文でよく居残りしてました）。
アドバイスや改善点がありましたら、ご指摘お願いします。
何時の間にか、ＰＶ３万・ユニーク１万超えてました。ありがとうございます。

第八話『災厄の使者』

――凛は夢を見ていた。

大自然の中を四人の男女が駆け抜けて行く。その地形を一言で言い表すなら、樹海だろうか。

四人は格好も武器もバラバラだった。赤い鎧（レウスS）に大剣（炎剣リオレウス）の男、緑の鎧（レイアS）に弓矢（クイーンブラスターIII）の女、土色の鎧（ディアブロS）に槍（角槍ディアブロス）の男、水色の鎧（バサルU）に狩猟笛（ヴォルカニックロック）の女、という風に……。しかし、その目的は同じだ。

そして、その“目的”が現れる。ソレは、刃と化した翼に鞭のような尻尾、黒い体毛と鱗を持っていた。――『迅竜ナルガクルガ』、その討伐が彼等がギルドから受けたクエストだった。

そして、殺し合いが始まる。その四人の身体能力は超人と言えるレベルだが、サーヴァントには遠く及ばない。

しかし、一矢乱れぬ連携と様々な道具を使って迅竜を追い詰めていく。

やがて、迅竜は力尽き息絶えた。そこからはスプラッターな光景だった。一言で言うなら、解体だ。そして、解体した素材を運んで帰っていく。

帰った彼等は酒を飲み、肉を喰いながらクエストの成功を祝う。

その世界は危険に満ちていたが、同時に、未知への探究や生命にも満ち溢れていた……。

凛が目を覚ますと、視線の先には見慣れぬ天井があった。

「…そっか。士郎と同盟を結んで、衛宮の屋敷にいるんだっけ」

数秒かけて思考を整理していると、夢のことを思い出した。

「あの夢は、ハンターの記憶……よね。マスターとサーヴァントのラインを通じて記憶が流れ込んで来てるのかしら？　っていうこと

は――」
逆に凛の記憶がハンターに流れ込んでいる可能性もある。そのことに気付いた凛は、隣のハンターの部屋に向かったが、その部屋にハンターの姿はなかった。

士郎が目覚めて居間に着いた時には既に桜が朝食の準備を終わらせていた。昨日の鍛錬の後はちゃんと自室に戻って寝たのだが、寝坊してしまったようだ。
「悪いな、桜。寝坊しちまった」
「いいえ、気にしないで下さい。むしろ、わたしに任せて先輩はもっとゆっくりしていて下さい」「ム、そういう訳にはいかないぞ。朝は桜の方が忙しいんだし、やれることはやらないと。ところで、他のみんなは？」
今、居間にはいるのは士郎と桜の二人だけだ。朝に弱い凛はともかく、他の三人が食事に来ないのは明らかにおかしい。
「藤村先生は竹刀の音が聴こえるって言って道場に行きました」
と、なると、セイバーとハンターも道場だろう。
「じゃあ、ちょっと見てくるよ」
そう言って、士郎は道場に向かった。
――と、士郎は土蔵の前に凛が立っているのに気付き、近付きながら声をかける。
「どうしたんだ？　遠坂。そんな所に立って？」
「……別に。ただ、魔術を教えるんだから、士郎の工房がどんなのか見ておこうと思っただけよ」
見ると、土蔵の扉が開いている。
「俺のは、工房なんて呼べるものじゃない。遠坂に見せるのが恥ずかしいぐらいだ」
その言葉に凛は士郎を睨み付ける。
「そう……。自覚は無いのね。貴方」
はて、一体、何を自覚すればいいのだろうか？

「土蔵に何かマズいものでもあったのか？」
「一応聞くけど、中にあるガラクタはナニ？」
「ああ、それは強化の息抜きに投影で創った失敗作だよ。形だけで中身がないんだ」
「息抜きに投影！？　そんなこと他の魔術師に言ったら、ホルマリン漬けにされるわよ」
凛は最早、士郎に敵意さえ向けている。
それも当然だろう。性質を強化する魔術――『強化』。その一段階上に性質を変化させる『変化』という魔術がある。そして、イメージを元に物体を作り出す魔術である『投影』は『変化』のさらに上だ。その『投影』した物質も、世界からの修正により長くは保たない筈なのだ。
これは、足し算が難しいと言いながら、微積の問題が簡単と言っているようなものだ。もっとも、未知の計算法を使って、答えは間違えているが。
「……ええと、遠坂。何か間違ってるのか、俺？」
「ええ。魔術師としては間違いだらけよ、貴方。でも、そうね……。投影の方が強化より才能あるのかも」
「けど、出来るのは何の役にも立たない、中身のない失敗作だけだぞ？」　そう、そこが問題なのだが、
「何か決まった属性があるのかもしれない。まあ、そこら辺は学校から帰ってから調べましょ。
ところで、士郎。ハンター何処にいるか知らない？」
「それなら、今から呼びに、道場に行くところだよ」
「そう。じゃ、行きましょ」
そうして、士郎と凛は道場に向かった。

道場では、ハンターとセイバーが竹刀で試合をしていた。入り口の横では大河が真剣な顔で様子を昨日のハンターとの試合で負けたからだろうが、その真剣さを他の場所でも発揮出来ないものだろう

か。
ハンターは二刀流で、踊るように激しく打ち込み、セイバーは竹刀一本でそれを捌いている。二人とも昨日の一件から、竹刀を折らないように加減していたが、元々人間の力では竹刀は簡単に折れない。
結果として、二人の動きは、離れている動体視力の良い人間ならば見えるが、人間では真似出来ないものとなっていた。
「ハァッ！」
ハンターが回転しつつ右手の竹刀をセイバーに打ち込むが、セイバーは竹刀で受け止める。だが、ハンターは更に左手の竹刀も打ち込み、二本の竹刀でセイバーごと弾き飛ばす。
ハンターは弾き飛ばされたセイバーの着地を狙って、竹刀を交差させ鋏のようにセイバーの首を刈りにいくが、セイバーは体を前に倒すことで、その一撃を避ける。
今、セイバーの目の前には、がら空きのハンターの腹がある。セイバーは、そこに横薙に打ち込むが、ハンターは右手の竹刀の柄で防ぎ、左手の竹刀を振るう。
はっきり言って、剣道ではない。セイバーは剣術の基本を押さえていたが、ハンターは無茶苦茶だ。ただ竹刀を振っているだけ。
だが、一つの武器にかけられる力の上限が同じで、常に上限ぎりぎりの力で打ち合えるなら、武器が多い方が有利なのは確実だ。
その証拠に、最後にはセイバーが竹刀を弾き飛ばされて試合は終わった。と、セイバーが士郎達に気付いて、
「どうかしたのですか？　シロウ」
「いや、朝食が出来たから呼びに来たんだけど」
「そうですか……。では、行きましょう。」
セイバーは何故か、ハンターを恨めしそうに睨んで、道場を出て行く。その背中には、哀愁が漂っていた。
士郎とセイバーが居間に向かう途中、

「なあ、セイバー。俺に稽古をつけてくれないか？」
士郎が、突然そんなことを言ってきた。
「何故ですか？」
「いや、サーヴァント相手でも生き延びられるぐらいにはなりたくてさ」
「……そうですね。サーヴァントの力を経験しておくのも良いでしょう」
そうして、士郎とセイバーは後で稽古をすることになった。

道場には、凛とハンターだけが残っている。大河は試合が終わってすぐにいなくなっていた。
「そう睨むなよ、凛。どうしたんだ？」
凛はハンターを仇のごとく睨み付けている。
「ねえ、ハンター。アンタ、夢見なかった？」
「知らないのか？　サーヴァントは夢を見ないんだぜ、“マスター”」
「そ、そうだったわね。馬鹿なこと聞いたわ。ところで、良いの？セイバーは行っちゃったわよ？」
食事時に、ハンターがセイバーを放置するとは考えられない。
「大丈夫だ。さっきの試合で朝食のおかわりの優先権を賭けてたからな」
さっきのセイバーの態度の原因はそれだ。
「でも、藤村先生は？」
「……あ！」
ハンターは大河の存在を忘れていたらしい。それに気付いたハンターは全速力で居間に向かった。
やはり、朝食は戦争だった。猛獣三匹の食費は容赦なく衛宮家の家計を削っていく。

そして、学校。ハンターは凛と士郎の護衛。セイバーは近くの廃

ビルで待機している。
放課後に呪刻を無効化する。それが終わった後、
「士郎のおかげで、生きてる呪刻はほとんど消せたわ。でも、魔力感知はダメなのに世界の異常には敏感なのね、貴方」
と、凛が士郎を誉めつつけなす。士郎のおかげで、以前調べた時には見つけられなかった呪刻を見つけられたのだ。
そこで、凛はふと気付く。異常な投影魔術と世界の変化に敏感なことに納得のいく説明ができる答えに……。
「どうしたんだ？　遠坂」
凛が深刻な顔をしていたので、士郎は話しかける。
「べ、別に何でもないわ。それより、わたしはちょっと準備があるから先に帰ってて」
だが、凛はその答えを否定する。“ソレ”は、魔術師にとっての到達点といえるものだ。半人前が無意識に覚えられるようなモノではない。
「わかった。遠坂も気を付けろよ」
そう言って士郎は帰って行く。
士郎が校門を出てからセイバーと合流しようと思っていると、
「遅いお帰りだね、衛宮。呪刻潰しなんてせずにさっさと帰れば良かったのにさ」
背後から、そんな言葉をかけられた……。

第八話『災厄の使者』（後書き）

夢の装備は、レウスＳ・レイアＳ・ディアブロＳ・バサルＵです。
ちなみに、レウスＳがハンターです。
武器は鎧の素材と同じモノ。
これらは、神秘が宿っておらず、持ち主も英雄とかじゃないので、
宝具ではありません。

試合でセイバーが魔力放出を使わないのは、省エネと大河がいるか
らです。

第九話『災厄の使者ＩＩ』（前書き）

感想お待ちしてます。

原作と同じ、且つハンターがいないシーンとかは省略してます。
精神力とかがもちません。

ちなみに、自分は多分、会話シーンと心情描写が苦手です。
まあ、徐々にマシになるようにしますが…。

第九話『災厄の使者ＩＩ』

凛と別れて、自宅に戻ろうとしていた士郎に背後から声がかけられる。
「遅いお帰りだね、衛宮。呪刻潰しなんてせずにさっさと帰れば良かったのにさ」
士郎は、その声に身構えつつ振り返る。そこにいたのは、
「慎、二……？」
その疑問を孕んだ確認に間桐慎二は、
「どうしたんだい、衛宮？　そんなに身構えてさあ」
にやつきながら応えた。
「呪刻潰し――そんな事を言えるって事は、おまえ」
士郎は慎二を睨み付ける。
「ああ、そういう事。おまえが虱潰しにしてくれた結界は、僕が仕掛けた保険なんだぜ？　あれが無くちゃあ、こっちは怖くて学校に来れないじゃないか」
『保険』という言葉に、敵意を弱めた士郎を見て、慎二は話し始めた。
慎二の話によると、彼は望んでマスターになった訳ではなく戦う意志も無い。学校の結界も、自分から発動させるつもりはないらしい。
士郎も、慎二が何もしないなら手は出さない、と約束する。
だがさらに、慎二は士郎に協力を持ち掛けてきた。曰わく、間桐は魔術師の家系であり、魔術回路は絶えたが、知識は残っているらしい。だが、そこで一つの疑問が生まれる。
「……慎二。おまえがマスターだって事を、桜は知ってるのか？」
桜を殺し合いに巻き込みたくない士郎に、慎二が答える。その顔に、紛れもない嘲笑を浮かべて。
「はあ？　本当に何も知らないんだな衛宮は。いいか、魔術師の家

系は長子にしか秘儀を伝えないんだ。それ以前に、あんなトロい女に魔道を伝えるもんか。間桐の秘儀を継いだのは僕だけだ」
それはつまり、桜は無関係ということだ。士郎は、その事に安堵するが、協力は受けないことにする。
殺し合いをするつもりは無いが、十年前と同じ事が起こる可能性を見逃すつもりも無い。第一、本当に戦うつもりがないなら、教会に行って聖杯戦争からリタイアすればいい。
その答えに慎二は一瞬、不愉快そうに顔を歪めて、
「わかったよ。けど兄貴としてさ、殺し合いをしてるヤツの家に妹は置いておけない。おまえが戦うっていうんなら、聖杯戦争が終わるまで桜は家から出さない。それでいいよな、衛宮？」
士郎も、それは了承する。桜の家族である慎二が言っているのだから、反論しても仕方ない。
最後に、慎二は自分がマスターであることを口止めする。士郎も黙っていると約束するが、凛がそのことを知ったとしても凛を止めない、と告げる。
そして、士郎は今度こそ夕暮れの校舎を立ち去った。

士郎がセイバーと合流し、自宅に帰った時には既に、桜の姿はなかった。大河が教えてくれたが、家から電話がかかってきて帰ったらしい。
やがて凛も帰ってきて夕食になるが、その場を支配していたのはどこか重苦しい静寂だった。その静寂を打ち破ったのはハンターだった。
「なぁ、士郎。あの桜って嬢ちゃんはどうしたんだ？」
慎二との約束がある以上、本当の理由は言えないので、
「ああ……。最近は物騒だから、桜の家族が心配してるんだ。それに――」
物騒の原因は聖杯戦争であり、それに関わっていく以上、衛宮邸は危険の中心といえる。

その答えに、ハンターは、
「まぁ、オマエがそれで良いなら、俺は何も言わねぇがな……」
そう言うと、再び食事を始めた。その話を聞いていた凛が深刻な顔をしているのに気づけたのは、ハンターだけだった。

食事の片付けが終わった後、士郎は凛の部屋に来ていた。セイバーとハンターは道場に行っており、士郎も後から向かうことになっている。ちなみに、大河は夕食後に帰った。
今日の目的は、士郎の属性を聖別で判断することだったのだが、
「……該当なし。これ以上は無駄ね」
なんて言って、凛は早々に衛宮士郎という魔術回路の判断を放棄した。
「うわ。それって判らないってことか？」
「失礼ね。士郎が五大元素に関わってないってコトは判ったわよ。そこから先の聖別はわたしの専門外だから、これ以上調べるのは無駄でしょ。あとは実際に色々投影してもらって、使えるのがないか探すだけよ」
その後、土蔵に移動し、凛に言われた物の投影を始めた。投影したのは、土瓶・金属・宝石など。しかし……、土瓶以降、高価な物から投影するよう指示されている気がするが、偶然ということにしておこう。
だが、全て外見は出来ていても中身が無く、失敗だった。
そうやって士郎が投影している間に、凛は土蔵に転がる失敗作を見ていく。その一つであるフードプロセッサーを見て、凛は声をかける。
「ねえ、士郎。貴方が一番イメージしやすいものって何？」
それには、唯一“用を為している（中身が有る）”部分があった。
「そうだな……。よく夢に見るのは、剣かな」
よく夢に剣が出てくるというのは、フロイトの夢分析で言うなら○○○（※放送禁止用語の為、規制）であり、そうでなくても危険

人物だが、それはこの際無視する。
「じゃあ、ナイフを投影してみて」
そう言われて投影したナイフは、成功だった。
「……！！　遠坂、これ！？」
初めての投影成功に喜ぶ士郎だったが、
「どうやら、士郎の属性は“剣”みたいね。でも、微妙ね。サーヴァント相手にただの剣じゃ効果が無いもの。そもそも、人間の身体能力じゃ、勝負にならない」
接近戦は言うに及ばず、投げたとしても牽制にもならない。
「まあ、いいわ。稽古が終わったら、もう一度来て。魔術回路のスイッチを付けてあげる」
「今じゃ駄目なのか？」
「用意もあるし、しばらく動けなくなるんだけど、それでも良い？」
「……。わかった、後で来るよ」
そう言って、士郎は道場に向かった。

道場ではやはり、セイバーとハンターが試合を行っていたが、士郎が入って来たことに気付いて中断する。
「来ましたか、シロウ」
「すまない。少し遅くなった」
「女を待たせるとは、感心しねぇな？」
ニヤニヤしたハンターがおどけた風に言う。その言葉にセイバーは、
「なっ？！」
凄く分かりやすい反応を返した。
「冗談だ。セイバー、オマエは真面目過ぎだ。で、士郎は何か判ったのか？」
「ああ、遠坂が言うには俺の属性は“剣”らしい。実際、ナイフは投影できた」
「士郎がセイバーのサーヴァントを召喚したのは、必然って訳だな」

触媒を用いない召喚の場合、召喚される英霊は召喚者に近い性質の者になる。それは、凛とハンターにも言えることだ。
「まぁ、剣を投影っていうことは、稽古も意味があるしな。準備があるから、オレは一度戻る」
そう言って、ハンターは道場から出て行った。
「なあ、セイバー。準備って、何の準備だ？」
士郎は稽古の準備をしながら、ハンターの行動について聞いてみる。
「そのことですか。さっきハンターにシロウの稽古について話したら、ハンターも手伝いたいと言ってきたのです。実際、全力を出せない私よりハンターの方が適任です。
しかし、ハンターは手加減が苦手らしいので、竹刀の殺傷力を低めに行きました」
「そういうことだ」
その声に道場の入り口を見ると、古い布団を竹刀に紐で巻き付けた物を持ったハンターがいた。　しかも、初めてセイバーと戦った時の黒い鎧姿で。
「……なんでさ？」
実戦に近付けたいのは分かるが、いくら何でもやりすぎだ。
「なぁに、オマエは強くなる気がするから、鍛えてやろうと思っただけだ」
それは嬉しいのだが、その根拠はドコにあるのだろうか？士郎は訊ねることにする。
「ちなみに、強くなると思う理由は？」
その質問に、ハンターは自信満々で答えた。
「……カンだ！」
士郎とセイバーはずっこけそうになった。
その後、士郎は十数回吹っ飛んだ。稽古が終わる頃には、体中痣だらけだった。
それから、凛の部屋に行き魔術回路のスイッチを作る為に宝石を

飲み、その日は早々に寝ることにする。

翌朝、士郎が起きると体の痣は完全に治っていた。魔術回路のＯＮ／ＯＦＦも問題ない。

傷の治りが早い気もするが、気にしないことにして、朝食の準備に向かった。

そうして朝食を食べ、登校する。

昼休み、凛と士郎は屋上で待ち合わせをしていた。理由は勿論、作戦会議だ。だが、昼休みになって十五分が過ぎても凛が来ない。

士郎が心配になって様子を見に行こうとした時、凛が屋上にやって来た。

「遠坂？」

「ごめん、遅れた。なに、その顔？　ひょっとして、心配してくれてたの？」

冗談めいた事を言いつつも、凛の顔は真顔だ。完全に“あかいあくま”モードの凛に顔を引き吊らせながら、

「遠坂、おまえ――」

何かあったのか、と訊ねようとした士郎は、凛の手に血がついていることに気づいた。これはつまり、

「遠坂。とてつもなく悪い予感を口にするんだが」

「なによ。つまんない事言うならヒドいわよ」

一体、どんな風に“ヒドい”のだろう。まさか、“ぶッ血ＫＩＬＬ”のだろうか。

「いや。おまえさ、もしかして誰か殴って来たんじゃないのか？」

その言葉に反応するハンター。

「よくわかったな、士郎。いやぁ、いいパンチだった。オマエにも見せてやりたかっ――」

「消えてなさい、ハンター！」

饒舌に語るハンターだが、凛に霊体化させられ、黙らされる。凛

は「ふぅ」と一息吐くと、
「ご名答。慎二が『自分もマスターになったから、二人で手を組まないか』ってうるさいからナックルパートをお見舞いしてきたわ。……校舎裏で」
それなら血の跡も、指が腫れていることにも説明がつく――が、
「待て待て待て！　慎二を殴ったってどういう事だ、遠坂！？　っていうか、慎二がマスターだって事知ってたのか？」
少なくとも、昨日は知らなかった筈だ。
「さっき聞いたのよ、本人からね。
殴ったのは、最初は鬱陶しいだけだったんだけど、士郎がいるから間桐くんはいらないって言って、わたしと士郎が一緒に住んでるって教えてから、かなりおかしくなって聞くに耐えなくて、つい……。まあ、慎二がマスターになる訳ないってタカをくくってたから驚いたけど、慎二は魔術師じゃないし、マスターとしての気配もない、わたしたちが捜してる相手とは別物よ」
凛の発言に、士郎は色々ツッコミたくなったが、それはつまり、学校には自分達を含めて四人のマスターがいるという事だ。
だが、最も優先しなければいけない問題は、
「……遠坂。学校の結界を張ってるのは慎二だぞ」
「……え？」
凛の動きが止まる。凛は慎二が結界の主だと気づいていなかったらしい。
「違うんだ遠坂。たしかに慎二は魔術師じゃない。けど、あの結界は慎二が張ったものだ。
きっとサーヴァントの方が魔術に長けてるんじゃないか」
凛の顔が青ざめていく。
「遠坂。おまえ、気づいてなかったのか？」
「……ううん。あの結界がサーヴァントによるものだって気が付いてた、けど……」
結界と慎二が結びつかなかったらしい。

「まずい。下手したら慎二のヤツ――」
すぐさま屋上を出て、慎二を捜そうとした。その、瞬間。世界が赤く塗り替えられた……。

第九話『災厄の使者ＩＩ』（後書き）

次回は、久しぶりの戦闘です。
多分、戦闘としては今までで最長になります。
このままいくと、次回で誰か消えます（笑）

第十話『山紫水明の地』（前書き）

サブタイトルは白く輝く幻獣ということから。

ハンターの情報等は後書きで…。

第十話『山紫水明の地』

赤い世界と化した校舎を三人が駆けていく。
先頭を行くのは、ハンター。その手には氷結晶で出来た剣と盾『氷牙』が握られている。この装備は、建物内での取り回しを考慮したものだ。
二番手は、凛。既に宝石を取り出しており、射線を確保する為、他の二人より左を走っている。宝石の中には、ハンターに貰った物も混ざっている。
最後に、士郎。切れ味よりも強度を重視した剣を投影して、後方に気を配りつつ、ハンターの後ろを駆ける。強度を重視したのは、攻撃よりも防御を優先したためだ。
だが、士郎の注意は『氷牙』を見た瞬間、その剣に釘付けにされた。その剣の在り方は、とても真っ直ぐだった。ともすれば、頑固とも言えるほどに。大切な物を守る為に創られ、鍛えられ、振るわれ続けた。
しかし、その剣をハンターが持っていることには違和感を感じた。だが、そんな士郎の思考は凛によって中断させられる。
「士郎っ！　セイバーも結界が発動したことには気づいてるでしょうけど、この中に侵入するには時間がかかる筈よ。いざという時には、令呪を使って！」
「わかった。それで、令呪の使い方は！？」
「左手に意識を固めて。目は瞑った方がいい。頭の中で自分の令呪の形をイメージして、するっと紐解くだけでいいわ。もちろん、解く時は命令をしながらよ」
「わかった！」
そして、四階の、階段に一番近い教室に飛び込む。ハンターは教室の前で見張りをしている。
「「……！」」

そこに広がっていた惨状に二人は息をのむ。誰もが地面に伏し、意識を失っている。中には、肌が凝固している者もいた。
この結界――『他者封印・鮮血神殿（ブラッドフォート・アンドロメダ）』は、魔術師やサーヴァントには効果が無いが、内部の人間を溶かし、魔力に還元するものだ。
いまいち動きの悪い凛に対し、士郎は冷静に倒れている生徒に近寄ると、脈と呼吸を確認する。
「……息はある。まだ間に合わない訳じゃない」
ならば、急ぐしかない。目指すは一階だ。士郎と凛が感じる結界の基点も、ハンターが感知したサーヴァントの気配もそこにあった。

そうして、辿り着いた一階の廊下の先。そこにいたのは、手に一冊の本を持った間桐慎二と黒衣のサーヴァント。慎二の顔は腫れており、鼻と口からは血が垂れていた。
その傍らには、慎二のサーヴァントである黒衣の女性。特徴は、長身・長髪・目隠し・露出過多といったところか。
「は。はは、あはは、あはははは！　見たか遠坂！　これが僕の力だ」
慎二が壊れたように笑い出す。
「慎二！　結界を止めろ！！」
士郎が叫ぶが、それが慎二に届くことはない。
「はあ？　止めろってバカだねおまえ！　サーヴァントの餌は人間だろ。それよりも遠坂！　これで僕と手を組む気になっただろう！」
慎二は誇らしげだが、
「……そう。魔術師やマスター以前に、人間として問題があるみたいね、貴方。いいわハンター、慎二のサーヴァントを倒しなさい」
「了解だ、凛！」
そう言って、ハンターが前に出る。
「っ、ライダー！」
命令を受けたライダーがハンターに飛びかかる。ライダーの両手には、鎖で繋がれた杭のような短剣。その短剣とハンターの剣と盾

がぶつかり合う。
剣戟の音が響く。一歩も動かずに迎撃に徹するハンターと、壁や天井すら足場として跳ねるライダー。
凛の魔術では、ハンターを巻き込みかねず、士郎の身体能力では足手まといになる。故に、二人はハンターの戦いを見守ることしかできない。
ハンターは、尚も迎撃するだけ。それを見て、慎二が笑う。
「は、なんだ、ただの木偶の坊じゃないか！　これでわかったろ遠坂！　僕の力が！！」
だが、ライダーはそう思っていなかった。自分の短剣は、敵の鎧に対して刃が立たず、死角から鎧の隙間を狙った筈の攻撃も最小限の動きで無効化される。何より厄介なのはその武器だ。武器が纏う凍気により、一撃毎にライダーの手の感覚は無くなっていく。
やがて、ハンターは、
「見切った！！」
死角から襲ってきたライダーの短剣を振り向き様に弾き上げる。そして、空中で仰け反ったライダーの左脚を膝から斬り落した……。
着地できずに、突っ込んで来た勢いのまま地面を転がるライダー。その体は十メートル程転がった後、慎二の前で止まった。
ライダーは何とか体を起こすが、当然立ち上がることはできない。
「……え？」
慎二は呆然とライダーを見つめている。
元より、ハンターはこの戦闘に時間をかけるつもりはなかった。故に、一撃で仕留める為に敵の動きを観察し、ライダーの戦闘能力の要である脚を狙った。
さらに、『氷牙』によって出来た傷口は凍り付いて壊死しており、治癒すらままならない。
そもそも、『狩人の性：小』が発動しているハンターに肉弾戦を挑んだ時点で結果は見えていた。
「終わりね、慎二。今すぐ結界を解きなさい。じゃないと……！」

凛が冷徹に告げる。だが、慎二は持っていた本を強く握り締めながら、
「……く！　どうにかしろ、ライダー！！」
その命令に応えて、ライダーが自らの顔に手をかける。それに気づいたハンターがとどめをさそうと駆けるが、転がって出来た距離がライダーの味方となった。
そして、『自己封印・暗黒神殿（ブレーカー・ゴルゴーン）』が解除され――、瞬間、全てが凝固した。
ライダーの眼は、四角い瞳孔と凝固した灰色の虹彩、第六架空要素（ル）で出来た網膜を持つ、ヒトならざる“眼（まなこ）”だった。
「くそっ……！」
ハンターにとって、ライダーの魔眼は鬼門だ。魔力が低いハンターではライダーの魔眼に抗えない。現に、ハンターの体は既に足から胸までが“石化”していた。
「石化の魔眼！　まさか、メドゥーサ！？」
凛が悲鳴にも似た声を出すが、士郎には彼女がどんな顔をしているかわからない。凛も士郎の顔を見ることはできないだろう。
ギリシア神話の怪物――メドゥーサ。毒蛇の髪に猪の牙、青銅の手、黄金の翼を持つと伝えられるソレ（メドゥーサ）の最大の武器が見たものを石化させる眼だ。
既に二人共、ライダーの魔眼に囚われている。
「どうしたんだい、遠坂？　君のサーヴァント、――ハンターだっけ？　簡単に固まっちゃってさあ！」
慎二が顔を醜く歪めて言うが、まだカードは残されている。それも、切り札（ジョーカー）と言えるものが。その切り札とは、
「来い！　セイバーーー！！！」
士郎の令呪の一画が使用され、消えていく。それを代償として、空間を割り砕き青き騎士王が参戦した。
「……な！？」
慎二が呻く。状況はまたも逆転した。左脚を断たれたライダーと

対魔力で“石化”を“重圧”にまで押さえ込んで五体満足のセイバー。
これでは戦闘にすらならない。セイバーがライダーを処刑して終わりだ。
このままでは、自分一人が残される、と悟った慎二は、
「ラ、ライダー！　僕は撤退する。おまえは足止めをしろ！！」
そう言って、走り去っていく。セイバーもそれを追わない。今は、ライダーを優先するべきだ。
そのライダーは壁にもたれかかって立ち上がり、短剣を構えている。その様子を見てセイバーが訊ねる。
「ライダー、まだ戦うつもりですか？」
「忘れたのですか？私は“騎乗兵（ライダー）”のサーヴァント。自らの脚など不要です」
そう言って、ライダーは、おもむろに自らの喉を切り裂いた。
血飛沫が舞う。ライダーから吹き出る赤い液体は彼女の命そのものであり、その行為は自殺に等しい。
だが、その血液は空中に留まり、魔法陣を描いていく。その魔法陣は、とてつもなく強大な魔力の塊だった。
その照準が向けられているのは、魔眼によって動けない三人。
――最早、間に合わない。ぎちり、と肉をこじ開けるような音と共に、ライダーの髪が舞い上がる……。
この危機的状況に、既に頭以外石化したハンターが声をあげる。
「チッ！　使いたくなかったんだがな。凛、いざという時は魔力提供を止めてくれ！！」
「待ちなさい、ハンター！　そんな状態で一体何するつもり？」
凛はハンターの真意を問おうとするが、答えが返ってくる前にライダーが真名を告げる。
「“騎英の（ペルレ）……手綱（フォーン）！！！！！”」
その瞬間、魔法陣から白い光の矢じみたものが産み出され、駆け抜けてくる。士郎と凛はその光に己の死を幻視した。既に視界は焼

かれ、光しか感じられない。
　だが、その光の矢は数秒経ってもやって来ない。やがて、目が慣れてくると何が起こっているのかわかった。
一、セイバーは光の手前で倒れている。これは、ライダーの攻撃から士郎たちを庇おうとした結果だろう。
二、光の矢の正体は、幻想種である天馬だった。伝説通り、メドゥーサの血から生まれたソレの背には、手綱を握ったライダーが跨っている。宝具の効果か、天馬の力は龍種の域に達している。では何故、その突進が止まっているのか？
三、天馬の前には、黒い龍が立ち塞がっていた。その龍は背中に翼、頭に角を持ちながら、人の姿をしていた。手には爪を模した双剣『グライメデューサ』が握られており、天馬が纏う魔力とぶつかり合っている。
　以上が、士郎と凛の前に広がっていた光景である。
「■■■■■■ーー！！！！」
　黒い龍人が狂った雄叫びをあげ、纏っていた魔力ごと天馬の首を斬り落とした。

―ｉｎｔｅｒｌｕｄｅ―

「は、はぁ、はぁ、は……！」
　間桐・慎二は校舎裏の雑木林を逃げるように走っていた。と言うより、実際に逃げている。
「くそっ……なんだよ、なんなんだよ衛宮のクセに！！　セイバーなんか召喚しやがってっ……！」
　慎二はライダーを信頼していなかった。同様に、ライダーも内心では慎二をマスターと認めていない。実際、“慎二はマスターではない”のだが。
　故に、慎二はライダーの能力を知らなかった。そうして、脚を失ったライダーを見捨てた。ライダーにはまだ最大の切り札が残され

ていが、慎二はそれを知らなかった。
とはいえ、結果だけを見れば、その切り札は通用しなかった訳だが……。それでも、あの場に留まった方がマシだっただろう。
何故なら、慎二の判断は“最狂”の不幸を引き当てたからだ。
ふと前を見ると、慎二の進路に立ち塞がるように白い少女が立っていた。
「退けよ、ガキ！！」
それに気づいた慎二は怒鳴るが、少女は楽しげに、
「ダメよ、マキリの蛆虫さん。こんな明るいうちから、聖杯戦争を始めちゃ」
少女の全身に令呪が浮かび上がる。
「……は？」
目の前の光景が信じられないのか、慎二はただ呆然としている。
「来なさい、バーサーカー」
現れる巨躯、殺戮の権化。それを見て慎二は思考を投げ出した。
「それに、お兄ちゃんを殺すのはわたしなんだから……」
振り下ろされる岩塊、そうして間桐慎二だったモノは、単なる肉塊と血溜まりに成り果てた。

―ｉｎｔｅｒｌｕｄｅ―ｏｕｔ―

首をなくした天馬は、その断面から血を噴出させていたが、やがてその存在を薄れさせて流した血もろともに消え失せた。
乗っていたライダーは再び地面にうずくまっている。全力の攻撃を防がれた為か、既に結界は解かれていた。
龍人がハンターであるのは明白だが、雰囲気が違いすぎる。凛は気づいていたが、今のハンターの魔力消費量は尋常ではない。たとえ凛の魔力量でも一日経たずに干からびるだろう。
「ハンター、その姿は？」
近くにいたセイバーが立ち上がりながら声をかける。だが、

「■■■■ーーー！！！」
「くっ！？」
ハンターはセイバーに斬りかかった。セイバーも防御するが、やはり圧され気味だ。
凛はハンターの言葉を思い出し、慌てて魔力提供を止める。だが、尚もハンターはセイバーに襲いかかる。力任せに打ち付けられた『グライメデューサ』の刀身は欠けながらも、無理矢理にセイバーを吹き飛ばした。
そうして、ハンターは士郎と凛の方へ振り向く。凛に近付き、ゆっくりと左手の剣を振り上げる。凛はライダーの魔眼に囚われた時のように動かない。
「……っ！！」
それに反応できたのは士郎だけだった。
『殺される』、そう思った凛の前にハンターから彼女を庇うように士郎が立ち塞がった。その手には一本の剣。それで防ごうというのだろう。
しかし、その剣はガラスのように砕け散り、士郎は肩から胸まで斬り裂かれるという“致命傷”を受けて――、前に噴き出す血に押されるように、仰向けに倒れ伏した。
それと同時に、ハンターも鎧を維持できなくなり、士郎の隣に倒れる。
そうして、戦争は終わった。一連の混乱の中、ライダーの姿は消えていた……。

第十話『山紫水明の地』（後書き）

と、いうわけで慎二死亡（合掌？）。
色々フラグ立てといて、今回も凛は魔術未使用。…まぁ、そのうち。
葛○先生は、何もせずに撤退しました。

以下、武具の設定

『氷牙』

…氷属性の片手剣。

ハンターが生きた時代から約二百年前、北の小国を守る為に単身で侵略者の大軍団と戦った英雄が使った剣。
その強さは不死身と恐れられる程だったが、その男にとどめをさしたのは彼の息子だった。

ランク：B
種別：対人宝具
レンジ：1
最大補足：1人

ハンターが使っているのは模造品ではなく、オリジナル。
本来の担い手ではないが、使いこなしている。
武器として優れているだけでなく、氷結による追加ダメージあり。

『グライメデューサ』

…毒と氷属性の双剣。

ギアノスとイーオス素材で出来ている。

ランク：C－

種別：対人宝具

レンジ：1

最大補足：1人

『喰らいメドゥーサ』という作者の勝手な解釈により、ライダー及びライダーから生まれた天馬には効果は抜群。

『ドラゴンX（剣士）』

…見た目は悪魔っぽい。存在が龍と同位であるため、龍殺しには弱い。

ランク：A＋

以下、付加技能

『護法：A』

…全ての状態異常無効。ライダーの石化も解除可能。

『業物：B』
…武器の耐久力が上がる。セイバーと打ち合ってグライメデューサが折れなかったのはコレのおかげ。

『狂化：C』
…全てのパラメーターが1ランクアップするが、理性を失い敵味方すら区別できなくなる。

『回避距離UP：D』
…瞬発力が上がる、のみ。

元々は、ハンターの所持品ではない。
そこら辺は、夢で語られる予定。

第十一話『蠅虫の羽音』（前書き）

かなり久しぶりの投稿になります。
何か、内容あんまり無い気がしますが、リハビリということでご勘弁下さいｍ（＿＿）ｍ

長期休載のお詫びといっては、何ですが、感想の所で皆さんの質問に答えたいと思います。

それから、出して欲しい武器がありましたら、リクエストして下さい。

後、出来れば狩猟笛の活かし方がわかりません。アドバイス頂けると有り難いです。

第十一話『蠅虫の羽音』

凛の眼前には、二人の男が倒れている。
鎧を失い、灰色のインナーしか着ていない方は、弱々しくも規則正しく呼吸をしている。
問題なのは、もう一人の方だ。その赤毛の少年は、流れ出る血で制服を真っ赤に染め続けている。
セイバーも駆け寄って来るが、その傷を見て愕然とする。士郎の傷は肋骨を超えて、心臓と肺を完全に破壊していた。
「……士、郎？」
凛が呼び掛けるが、当然返事などない。
――確実な致命傷。それが、誰の目にも明らかな士郎の状態だった。
だが、士郎の身体に異変が起こる。破壊された臓器が再生されていく。傷口はそのままだが、再生された臓器が動き出すと、傷口や肋骨も再生されていき、数分後には元通りになった。顔色こそ悪いものの呼吸もしている。
理由は解らないが、凛とセイバーは安堵の息を吐いた。と、その時
「……うぅ」
ハンターがうめき声をあげた。当然、セイバーはハンターを警戒し、剣を構える。凛も注意深くハンターの様子を観察する。魔力提供は、まだ止めたままだ。
「ハンター。どういうつもり？」
凛が問い掛けると、ハンターはゆっくり起き上がりながら、
「あぁ、悪かった。凛。だが、あの鎧を使う以外に石化を解除する手段が無かった。あのまま、アレをくらう訳にもいかねぇだろ？」
「確かにそうですが、一体何なんです？　あの鎧は」
セイバーもハンターが元に戻っていると判断し、質問してくる。
「……あぁ。あの鎧は黒龍の素材で作られた物だ。着用者は、力を

得る代わりに狂化する。まぁ、よくある狂戦士の鎧ってヤツだ。
それより、凛。そろそろ魔力提供を再開してくれないか？　消えそうなんだが」
見ると、ハンターの足が透けている。凛もハンターの説明を聞いて、魔力提供を再開した。しかし、
「いい、ハンター。あの鎧は、もう使っちゃ駄目よ。一歩間違えると自滅することになるわ」
「あぁ、オレだって、できれば使いたくはねぇ。……手に入れたくて、手に入れたモンじゃねぇしな。それより、凛。いつまでもココにいていいのか？」
確かに。結界が解けた以上、倒れていた人たちもやがて意識を取り戻すだろう。
「そうね。後は綺礼に任せて、引き上げましょう。セイバーは士郎をお願い」
「わかりました」
そうして、綺礼に連絡をとる為に、電話のある職員室へ行った後、綺礼の指示で帰宅することになった。
綺礼曰く、学校に居たのに、凛だけ無事なのは不自然なので、学校に居なかったことにした方が良いらしい。
どちらにしろ、血まみれの士郎を見られるのはマズい。生徒や教師たちが目を覚ます前に凛たちは引き上げることにした。

―ｉｎｔｅｒｌｕｄｅ―

虫が蠢く緑の闇の中に、“大人しそうな少女”と人間“だった”モノがいた。
かつては、人間だった老虫が少女に語りかける。
「慎二が死んだ。アインツベルンのサーヴァントに殺されたようじゃな」
少女も、間桐慎二が死んだことは知っていたが、その相手までは

知らなかった。少女が慎二の死を知ったのは、突然ライダーとのラインが回復したからだ。
しかし、この老虫は慎二を殺した相手まで知っていた。つまり、この老虫は慎二に“まで”虫を仕込んでいたということだろう。
「孫可愛さで目をかけてやったが、とんだ不良品じゃった。サーヴァントを失わなかったのが唯一の救いか」
そう、ライダーは逃げ延びた。今は霊体化して、傷を癒やしている。
「〇。おぬし確か、戦いたくないと言っておったの？　しかし、慎二が殺されたとあっては、黙っておれん。サーヴァントを倒し、アインツベルンのマスターをここに連れて来るのだ」
この老虫が孫の為に動くとは考えられない。何か別の目的があるのだろう。だが、
「お爺さま。ライダーは、まだ傷が癒えていません。そうでなくても、ライダー1人でバーサーカーを倒すのは無理です」
「わかっておる。なんなら、衛宮の小倅共と協力してもよい。その後は、どうしようとおまえの自由じゃ」
『衛宮』という単語に少女が僅かに反応する。老虫にとっては、わかりきった反応だったが。
「〇、おまえが望むなら、一度ワシに偽臣の書を預けて衛宮の小倅の様子を見て来てもよいのだぞ？　流石に、死んでいれば、協力どころではないからのう」
老虫も一部始終を見ていたのだろう。少女もはっきりとは見えなかったが、その光景を見ていた。凛を庇って傷を負い、大量の血を流す衛宮士郎の姿を。
だから、少女は、老虫の出した条件を呑んだ。

―interlude―out―

凛とハンター、セイバーは衛宮邸を目指して歩いていた。士郎は、

ハンターに背負われている。
これは、ハンターが言い出したことだ。自分のせいなのだから、自分が運ぶべきだ、と。どうやら、狂化している間の記憶もあるらしい。
その士郎は、ハンターの背中でグッタリしている。服装は血まみれの制服のままだ。意識の無い者を着替えさせるのは、存外難しいので諦めた。
ちなみに、ハンターはいつものTシャツとGパンに着替えているが、セイバーの格好は穂群原学園の体操服となっている。これは、令呪による召還で服が消し飛んだ為、凛が保健室から掻っ払ってきたモノだ。
という訳で、現在この一団はかなり目立つのだが、凛が人避けの魔術を使っているので問題無い。というか、セイバーが体操服なのは、鎧姿だとその魔術と干渉してしまうからなのだが……。
そんなこんなで辿り着いた衛宮邸の前には、一人の少女がいた……。

第十一話『蠅虫の羽音』（後書き）

さて、いよいよ独自ルートに入り、書く難易度が上がって来ました。

完結目指して頑張りますので、宜しくお願いします。

ちなみに、サーヴァントは、真アサシン以外全員出ます。

第十二話『神父からの報せ』（前書き）

まず、謝ります。更新遅くてすいませんm（＿＿）m

遅くなった理由は、修正してたのもありますが、最大の理由は、テイルズオブヴェスペリアにハマってたからです。称号コンプする程に…。

なんか、キャラの口調とかがおかしい気がする。（眠いせいか？）

マズい所はご指摘下さい。

第十二話『神父からの報せ』

衛宮邸の前にいたのは間桐桜だった。彼女は凛たちの姿を認めると駆け寄って来る。

「先輩っ！」

というか、桜の目には士郎しか映っていないようだ。

「さ、桜？！　貴女、どうしてここに？」

凛が焦りながらも、桜に疑問をぶつける。人避けの魔術が効かないのは仕方がない、桜にも〇〇回路があることを、凛は知っている。

問題なのは、何故ここにいるかだ。今日も朝食をたかりに来た大河から教えられた事だが、昨日の夜にしばらく学校を休むとの連絡が桜からあったらしい。（大河は桜の担任ではないが、桜の所属する弓道部の顧問である）

聞いた時は、体調でも崩したのかと思うことにした凛だが、慎二がマスターだと判った今ならその訳もわかる。というか、士郎の発言を振り返ると事前に慎二がマスターと知っていた節がある。後で問い詰め（トッチメ）なければ。

「わ、わたしは学校で何か事故が起こったって聞いて……。それより、先輩は！？」

そう言いつつ、桜は士郎に近づいて行く。凛がマズいと思った時には既に遅い。何せ、士郎は血まみれのままだ。

だが、士郎の様子を見た桜は“安堵の息”を漏らした。その桜の反応に凛は違和感を覚えるが、

「遠坂先輩、衛宮先輩はどうなったんですか？」

「えーと……」

桜の質問に凛が詰まる。破れて血だらけの制服に血の気の失せた肌、そのくせ傷一つ無いという現状を説明できる筈がない。ちなみに、セイバーが体操服なのは、桜の目に入っていないらしい。

凛が答えに窮していると、

「もういいです。ハンターさん、先輩を寝かせるので部屋までお願いできますか？」
「わかった」
士郎を背負ったハンターが応える。そうして、桜を先頭に五人は衛宮邸へと入っていった。
ちなみに、凛は桜に感じた違和感を『うっかり』忘れていた。そして、“セイバーは”気づいてさえいなかった。

現在、居間では凛、ハンター、セイバーの三人が作戦会議をしていた。
士郎は自室で寝ているし、桜は士郎の看病をしている。
三人の話の内容は当然、桜に聞かれるとマズいものだが、英霊二人に気づかれずに盗み聞きができるのはアサシンぐらいなので問題ない。
「ライダーには逃げられたけど、正体がメドゥーサっていうのは分かったし、相当の深手は与えられたと思うわ」
ライダーは脚を失った以外にも騎兵の生命線ともいえる馬を失ったのだ。はっきり言って、現在最弱のサーヴァントといえるだろう。むしろ問題なのは、
「ですが、ライダーのマスターが大人しく引き下がるとは思えません」
「あぁ、手負いの獣ほど凶暴だからな。特にあのガキは追い詰められたら、何でもやるタイプだな」
学校の結界の事から考えれば、慎二とライダーが次にとる行動などわかりきっている。恐らく、誰かを襲い魔力を吸い取るだろう。だが、
「今日は放っておくしかないでしょ。士郎は目を覚まさないし、魔眼の対策も必要よ」
「ですが……！」
セイバーが凛の意見に反論しようとするが、続く言葉が出ない。

理由は簡単、凛が言っているのが正論だからだ。
魔眼がある以上、現状では凛とハンターには手が出せず、士郎を置いてセイバー1人が行くこともできない。
「まぁ、今日は脚の治療に専念してくれるように祈るしかねぇな」
確かにあれだけの傷なら、完治には一日以上必要だろう。
「魔眼対策は明日の夜までには間に合うようにするわ。だから、今日は休むしかないのよ」
凛も、慎二とライダーを放っておくのは本意ではないのか、渋面を浮かべている。
「でもまさか、反英雄とはね。慎二らしいというか何というか……」
反英雄――悪を行い人々から呪われながらも、それが結果的に人々の救いとなって奉られたモノ。英雄でありながら、英雄ではない矛盾した存在。
「反英雄……か」
そのハンターの小さな呟きは誰にも届かなかった。
と、その時、衛宮邸の電話が鳴った。凛がその電話に出ると、聞き慣れた声が聞こえてきた。言峰綺礼の声が……。

士郎が目覚めると、そこは自室だった。何故、ここにいるかはわかる。凛をハンターから庇って斬られたのだ。だが、それにしてはおかしい。傷も無ければ、痛みも無い。
そんなことを考えていると、廊下に繋がる戸が開いた。そこに立っていたのは、
「良かった！　先輩……」
「桜！？　なんでここに？」
「わたし、先輩のことが心配で……。それより、体は大丈夫ですか？」
「ああ、何ともないぞ。ほら。」
そう言って、士郎は立ち上がる。部屋が暗いのでわかりづらいが、顔色も元に戻っている。

その後、士郎には凛やセイバーに聞きたいことがあったので、士郎と桜の二人は居間に行くが、桜の前では聞けないので、聞き役に徹することになった。
説明によると、服はハンターが着替えさせてくれたらしい。制服は、上着はもう使えないので処分するしかないが、ズボンにはあまり血が付いていない為、桜が持って帰って何とかしてくれるらしい。
やがて、桜が間桐邸に帰ることになり、士郎が送ろうとするが凛に止められた。桜が慎二の妹である限り、危険は付きまとう筈なのだが。
桜を玄関で見送り、四人が居間に戻ってくる。士郎は今まで聞けなかったことを聞く。
「遠坂、あの後一体どうなったんだ？　学校のみんなは無事なのか？」
「そうね。まずはそのことから話した方が良いかしら。端的に言うと、みんなは無事よ。命に別状はないわ。ただ一人を除いてね」
凛の言葉に安堵した士郎だったが、最後の一言に表情を強張らせる。
「その一人は誰で、どうなったんだ！？」
「慎二が――死んだわ」
士郎の中で何かが『カチリ』と音をたてた……。

第十三話『正義の味方と騎士王と狩人』（前書き）

一部のサブタイトルが変わってますが、中身はそのままです。

第十三話『正義の味方と騎士王と狩人』

正義の味方（士郎）にとって、致命的な言葉を凛は言い放つ。
「慎二が……死んだわ」
「慎二が死んだってどういうことだ！？」
いつもの士郎からは考えられないような勢いで凛に詰め寄る士郎だったが、その言葉に答えたのはハンターだった。
「どういうことも何も、そのままの意味だ。さっき、言峰とかいう神父から連絡があった」
ハンターの言葉を凛が補足する。
「あの後、綺礼が後始末に来たんだけど、校舎裏の雑木林で慎二の遺体が見つかったそうよ」
士郎には言わないが、慎二の遺体はかなり酷い状態だったらしい。誰だったか以前に、何だったかが分からない有り様で、魔術を使って誰か調べたそうだ。
それから、凛が綺礼から聞いた情報には一つ気になるモノが含まれていた。
「一体、誰が……！？」
「さあ？　他の参加者の誰かだと思うけど。とにかく、慎二は行方不明っていうことになるらしいわ」
行方不明というのは世間に対しての説明であり、御三家である間桐には真実が知らされるのだが。
「じゃあ、さっき俺が桜を送るのを止めたのは――」
「まあ、慎二が死んだ今、桜が狙われる可能性が減ったのもあるけど……。少しは自分の体を心配しなさい、士郎」
治ったとはいえ、死にかけていた人間が出歩いて良い筈がない。
「そういえば、体の傷は遠坂が治してくれたのか？」
士郎が自分の体のことを“思い出して”訊いてくる。
「それは違います、シロウ。あの傷は貴方が自力で治したのです」

その質問にはセイバーが答えた。
「よくは分からないけど、ラインからセイバーの治癒力が流れ込んでるのかもしれないわ。でも、だからって、無茶しちゃダメよ」
何故治ったか分からない以上、次も治るとは限らないのだ。
「ああ、分かってる。俺だって痛いのはゴメンだ」
と、そこで凛の雰囲気が変わる。
「――ところで、士郎。何時から慎二がマスターだって知ってたの？」
顔は笑っているのだが、目がまったく笑っていない。一言で言うなら怖い。スゴく怖い。
「うっ。そ、それは……」
「私にも是非お教えいただけますか？シロウ」
「あぁ、それはオレも知りたいな」
セイバーとハンターからも圧力（プレッシャー）がかかる。
「き、昨日、遠坂と別れた後、学校で慎二から直接聞いたんだ」
「で、そんな大事なことを何で黙ってたワケ？」
「慎二が結界は保険で戦うつもりはないって言ってたし、マスターであることは喋らないって約束したんだよ。慎二が自分から明かしてきた以上、言いふらす訳にはいかないだろ」
その答えに、凛とセイバーは顔を見合わせ、溜め息を吐くと、
「お互い苦労するわね、セイバー……」
「まったくその通りのようですね、リン」
二人はどこか遠い目をしていた。
「ハッ、ハハハハハハ！！　約束したからって、いくら何でもお人好し過ぎるだろ？」
対して、ハンターは何かウケてた。
と、凛が急に真面目な顔になると、
「そのことなんだけど、慎二はマスターじゃなかったらしいの」
聖杯戦争の監督役である綺礼が連絡を寄越した理由、それは“マスターでも魔術師でもない人間”が殺されていたから。端的に言え

ば、事情聴取である。
「じゃあ、ライダーのマスターは……！？」
「誰かは分からないけど、ライダー共々生きてるでしょうね」
「じゃあ、また結界を使われたりしたら！」
そう言って、士郎が飛び出そうとするが、行く手を凛に塞がれる。
「そのことなら、しばらくは大丈夫。あの結界は準備に時間がかかるし、使えば他のサーヴァントを呼び寄せることになるから、傷が癒えるまでは使えない筈よ。
学校もしばらくは休校になるらしいから、今日はしっかり休みなさい」
そう言って凛は夕食の準備をする為に台所に向かった。時刻は八時前、今から調理するなら夕食には遅めだ。
士郎が手伝おうと立ち上がると、凛に「病み上がりは休んでなさい」と言われて止められた。代わりに、台所にはハンターが向かった。

夕食後、衛宮邸の縁側で士郎はぼんやりと月を眺めていた。頭の中にあるのは慎二のことだ。
確かに慎二のしたことは間違っている。だが、だからといって、殺しても良い筈がない。どうにかして慎二を救えなかったのか？
士郎がそんなことを考えているとセイバーとハンターが“居間の方から”やって来た。ちなみに、凛は風呂に入っている。
「シロウ、どうかしたのですか？」
「何を黄昏てんだ？　士郎」
士郎の様子が少しおかしいことに気づいた二人が話しかける。
「いや、慎二のこと考えてたんだ。どうすれば慎二を死なせずにすんだんだろうって……」
その疑問に先に応えたのはセイバーだった。
「良いですか、シロウ。世の中には“一”を切り捨てることで、“九”を救うという考え方があります」

セイバーが言っているのは正論だ。だが、
「でも、“十”を救えるならその方が良い筈だ！」
それを正義の味方（士郎）が認める訳にはいかない。
「ですが、“シンジという一”は“九”を傷つける！！　そもそも、加害者を被害者と同じように救うという前提が間違っているのです！」
士郎の言葉が琴線に触れたのか、セイバーの語気も荒くなる。
「だからって、加害者を殺せば解決するのか！？」
「そうは言っていません！　ですが、加害者を救う為に誰かを危険に晒す、というのが問題なのです！」
二人は徐々にヒートアップしていくが、
「ストップだ、二人とも。士郎、さっきのにオレも答えていいか？」
「あ、ああ」
「ええ」
ハンターが止めに入ったことで、二人は少し落ち着きを取り戻した。
そうして、ハンターは語り出す。己の答えを。
「まぁ、セイバーの言ったことは正しいな、その加害者が他人ならな。
だが、慎二は士郎の友だったんだろう？　だったら、救いたいと思うのが普通だ」
それを聞いてセイバーが俯く。友（ソレ）は、彼女が生涯手に入れることができなかったモノだ。
「んでもって、どうすれば慎二を救えたかって話だが、考えるだけ無駄だ。過ぎたことはやり直せないし、後悔しても何も戻って来ない」
その言葉にセイバーの顔が僅かに歪んだが、俯いていたために士郎もハンターも気づけなかった。
「でも、あんなことになるって知ってたら……！」
士郎は反論するが、

「いいか、士郎？　結果の分かりきったモノほど、つまらないモノはねぇ。分からないからこそ、良いんだろ？」
そう言って、ハンターは話を切り上げると別棟の自室に向かって歩き出した。だが、その途中でふと思い出したように振り返ると、
「あぁ、そうだ。オレが言えた義理じゃねぇんだが、凛を庇ってくれてアリガトな、士郎」
そう言うと、今度こそハンターは自室に向かった。後には、心が少し軽くなった士郎と、逆に重くなったセイバーが残された。
余談だが、翌朝、士郎が台所に行くと食料が減っていたそうだ。

第十三話『正義の味方と騎士王と狩人』（後書き）

次回は久しぶりに凛が夢を見る予定です。
内容としては白い祖なる○が出ます。

自分のせいなのですが、プロットが大雑把過ぎて、苦労してます。
分かり易く人体で例えると、頭蓋骨と背骨だけしか出来てないようなモノですな。
まあ、そんなのでも無いよりマシだとは思いますが。

第十四話『祖龍』（前書き）

夢の部分が想像以上に長く、作者史上最長に…。

夢の中の台詞がほとんど無いのは、Ｆａｔｅ本編がそんな感じだからです。

武器解説は後書きで。

第十四話『祖龍』

――そこに在るのは、朽ち果てながらも雲を貫き、そびえ立ち続ける巨塔。その入り口と思しき場所の前には、見たことのある四人がいた。

それを見て、凛は理解した。これは夢であり、ハンターの記憶なのだと。

彼らは塔に入ると、黒い小型竜『蛇竜カブラス』や仮面を被った小人『奇面族チャチャブー』などの怪物を倒しながら塔を登っていく。

その様子を見て凛は思う。ハンターから聞いてはいたし、前の夢でも見たが、五千年後は相当な魔境になっているようだ、と。

彼らは時折、何かを紙に描き込んでいる。その様子から察するに地図を作っているらしい。

今回、彼らが受けたクエストは新しく発見された古塔内の安全確保と地図作成であった。

途中、道が分かれている為、二手に分かれる。

凛が見る記憶に映るのは、赤い鎧の男と緑の鎧の女の二人だった。ハンターの記憶であることを考えると、この赤い鎧の男がハンターなのだろう、と凛は判断する。

二人の様子は一言で言うなら、恋人同士だった。主に、ふざけるハンターに女がツッコミを入れていた。この組み合わせは、残りの二人が気を利かせたのかもしれない。

その後、合流した四人は頂上に辿り着く。頂上付近は外壁がほとんど残っておらず、眼下の雲海と頂上よりも高い雲の隙間から射し込む光が幻想的な光景を作りだしている。その片隅には一本の大剣が突き立っていた。

四人が地図を描き終え、帰ろうとした時――、突如“赤い雷”が落ち、頂上への唯一の出入口を崩す。それと同時に、巨大な影が四

人の影を飲み込んだ。
その姿を四人と同時に凛も見る。白い巨体を、“最強の幻想種”を……。
ソレの姿は白く輝く体毛、王冠の如く頭を飾る四本の角、そして全身を覆う白銀の甲殻という神々しい姿ながら、同時に殺人的なまでの凶暴さを感じさせる。『祖龍ミラルーツ』そう呼ばれるソレは、悠々と四人の上を越えて残っていた柱の上に降り立ち、四人を見下ろすと、――吼えた。
それだけで、頂上の広間には数十条の雷が降り注ぐ。その光景はさながら神罰のようである。
凛には、その一条一条に並の魔術師数十人分の魔力が込められていることがわかった。ただ吼えただけでこれだ。その力には戦慄するしかない。
何とか雷は避けた四人だが、動揺は隠せない。簡単なクエストの筈が、今居るのは完全な死地。退路は無く、目の前にいるのは恐らく伝説中の伝説の存在。
そして、祖龍はゆっくりと降りてくる。三人が動けないでいるなか、ハンターだけが武器を構え、前に一歩を踏み出した。その姿を見た三人も武器を構える。
そうして、抗いという名の戦いが始まった。
だが、結果から言えば戦いになどなる筈がなかった。その最大の要因は、甲殻の強度が高すぎて弾かれ、攻撃が通らないことだ。
逆にハンター達は一撃でも食らえば終わりだ。そんなものが戦いである筈がない。
やがて、限界が来た。祖龍の爪の一撃を防御したハンターの武器『炎剣リオレウス』が真っ二つに折れる。同時に、爪がハンターの胸を斬り裂き、血が噴き出す。
恋人らしい緑の鎧の女が悲鳴を上げる。幸い、内臓には達していないようだが動けないハンターに、祖龍は口から雷球を放った。
だが、雷球が届く前にハンターは誰かに突き飛ばされた。それが

誰かハンターが視認した次の瞬間、“緑（彼女）”は白く塗り潰された。残ったのは肉の焼ける匂いとハンターの記憶に刻まれた柔らかな微笑みだけ。

その時だった。世界が契約を持ちかけてきたのは。

彼は許せなかった。力の無い自分が、彼女を殺した祖龍が。だから、

『あぁ、契約してやる！！　だから、アイツをブっ殺す力を寄越しやがれぇぇぇぇぇ！！！』

世界と契約し、己の死後を売り渡した。

そして、突き立っていた大剣に駆け寄ると、その大剣『封龍剣【超滅一門】』を引き抜いた……。

今日の凛の寝覚めはいつにも増して悪かった。

理由は明確、ハンターの記憶のせいだ。まともな人間なら、あんなものを見せられて気分良く目覚められるワケがない。しかし、

「やっぱり、英霊になるヤツの人生ってのは壮絶ね」

普通の人間の人生がハイキングコースなら、英雄のそれ（人生）は絶壁と落とし穴の連続であろう。ちなみに、魔術師の人生には絶壁はよくあるが、落とし穴はそれほどない。

おそらくは、あれがハンターにとって最初の落とし穴（恋人の死）であり、絶壁（祖龍）だったのだろう。

しかし、世界というのは意地が悪い。契約を迫るのなら、彼女が死ぬ前でもよかった筈だ。そこで、ふと思い至った。

「まさか、ハンターが聖杯戦争に参加した理由って……！？」

彼女（恋人）を蘇らせる為ではないのか？

英霊というのは『輪廻の輪』からも『因果の枠』からも外れた存在だ。故に、彼らは平行世界から召喚されることさえある。

例え、ハンターが過去である現代を変えても、新しい未来（平行世界）が生まれるだけだ。ならば、彼女を救うには奇跡（聖杯）に頼るしかない。

「ハンターの戦う理由、か。後で訊いとかなきゃ」
そうして、凛は部屋を出た。

道場では、今日も士郎が放物線を描いていた。打撃的な意味で……。

朝食後、士郎、セイバー、ハンターの三人は道場で稽古を行っていた。といっても、ハンターが士郎を吹っ飛ばしているだけだったが……。

「――っぐ！！」

ハンターに飛ばされ、床に打ちつけられた士郎が苦悶の声を漏らす。その士郎にハンターが竹刀（布団を巻いている）を突きつける。

「これで、本日十四回目の死亡だな？」

ハンターが息一つ乱さずに言うが、士郎の方は息も絶え絶えといった様子だ。

「シロウ、何度も言っていますが、サーヴァントの攻撃を受け止めようとしているようでは、命がいくつあっても足りません。できるだけ避けるか、受け流すようにしないと」

それは士郎も分かっているのだが、実行するのは難しい。

「まぁ、こればかりは経験を積むしかないな。

なぁに、少しはマシになってるぜ、士郎。一撃で死亡から二撃で死亡になったしな？」

「そ、れは……マシに、なったって、言える……のか？」

ゼエゼエと息をしながら問う士郎にセイバーが答える。

「ハンターの動きを追えるようになっただけでも大きな進歩です。そろそろ、一度休憩にしましょう」

だが、と士郎は思う。今は同レベルの武器だが、実際に戦うとなれば話は違ってくる。昨日のように士郎が投影した“ただの剣”では話にならないだろう。そういえば、

「そういえば、ハンター弓持ってたよな？」

「あぁ、持ってるが、興味があるのか？」

「いや、学校の弓道部に入ってたことがあってさ。まあ、弓道で使うのは和弓なんだけどな」
士郎が使っていたのは、間違っても『勝利と栄光の勇弓ＩＩ』のようなキワモノではない。しかし、
「和弓ってひょっとしてコレか？」
そう言いながらハンターが取り出したのは和弓――『龍弓【天崩】』だった。
「え！？」
ハンターの無国籍さ加減に驚く士郎だったが、一目見ただけで、それが並の弓ではないとわかった。
「引いてみるか？　士郎」
そう言うと、ハンターは士郎に弓を渡してきた。普通、サーヴァントが自分のマスター以外に宝具を預けるなど有り得ないことなのだが、ハンターに限れば、それは例外だった。
渡された士郎は弓を引いてみるが、
「っ！　固いな」
士郎が引けたのは通常の半分程だった。
「いや、立派なもんだぜ、士郎。その弓は心が強くないと引けねぇからな」
「そうなのか？　でも、ハンターは引けるんだろ？」
士郎が弓を返しながら訊く。
「あぁ、だが最初は全く引けなかったぞ」
そんな話をしていると、
「ハンター、いる？」
凛がやって来た。昨日の夜遅くまで何かをしていたらしく、朝食には起きてこなかったが、やっと起きたらしい。
ちなみに、朝食の時に士郎が凛を起こしに行ったのだが、何故か赤くなって帰ってきた。
「何か用か、凛？」
「ライダーの魔眼対策ができたから、部屋まで来てくれる？」

そう言われたハンターは立ち上がると、セイバーに声をかける。
「悪いな。後は任せていいか、セイバー？」
「分かりました。さあ、士郎そろそろ再開しましょう」
その答えを聞いたハンターは鎧を解除し、いつもの普段着になると、凛と一緒に道場を出ていった。

自らの部屋で凛はハンターに昨日作った『翡翠に金の装飾を施したもの』と『銀製のアミュレット』をそれぞれ五個ずつ渡していた。前者が石化封じであり、後者はハンターの低すぎる対魔力を補う為についでに作ったものだ。
渡されたハンターはそれを宝具『狩人の歩み（アイテムボックス）』に取り込むと、瞑目した。十秒程して、
「……よし！できたぞ、凛」
そう言いながら目を開けた。ハンターは凛から渡されたものを鎧に取り付けられるよう、『防石珠』と『対魔珠』に加工し、取り付けていたのだ。
「はあ、思わぬ出費だったわ」
凛が溜め息を吐く。銀はともかく、金と翡翠の出費はなかなかのものだったのだ。
「ところで、アンタに訊きたいことがあるんだけど？」
「何だ？　士郎の好きなタイプでも訊いてくればいいのか、“マスター”？」
瞬間、ガンドが火を噴いた。それはハンターの側頭部を掠り、壁に穴を開けた。
「殺す気か！？　凛！」
英霊である以上、既に死んでいる筈だが……。まあ、避けなければ、頭部に直撃していた。流石にハンターといえども、鎧無しで当たればマズい。
「まだふざけるつもりなら、もう一発いくわよ？」
そう言う凛は微笑んでいた。だが、その表情から感じ取れるのは

明らかな怒りのみだ。それを察したハンターは、
「あ、あぁ。もうふざけねぇ。で、オレに訊きたいことって何だ？」
「アンタは何の為に聖杯戦争に参加したの？」
聖杯戦争に参加するサーヴァントの多くは、聖杯にかける望みがあるからこそ、マスターの召喚に応じるのだ。
「何だ、そんなことか。オレの目的は聖杯戦争に参加することだけだ」
だが、ハンターの答えは凛が予想していたものではなかった。
「アンタ、何言ってんの？　聖杯を使えば大抵の願いは叶うのよ！？」
どこか必死な凛に対して、ハンターは冷静だった。
「じゃあ、凛には何か願いがあるのか？」
「うっ！　そ、それは……」
凛が答えに窮していると、
「そろそろ昼だな。オレは行くぞ、凛。士郎に昼飯を作らせねぇと。あぁ、そうだ。壁は直しとかないとマズいんじゃねぇか？」
そう言って、ハンターは部屋から出て行った。

昼食後、士郎とハンターは買い出しに行くことになった。本来なら、後二日は保つ筈の食料が大幅に減っていたためだ。
つまみ食いの犯人（大食らい）はわかっている。ちなみに、凛は昨日の疲れから、セイバーは魔力の消費を抑えるために自室で寝ている。

買い物を終え、士郎が帰ろうとした時、背中から服を引っ張られた。
その頃、ハンターは勝手にたい焼きを買いに行っていた。

第十四話『祖龍』（後書き）

士郎の服を引っ張ったのが誰か？まあ、予想通りの人物ですが…。

以下、武器解説

『封龍剣【超滅一門】』

…絶一門との対決に敗れた滅の継承者が鍛えた大剣。再興への執念が驚異的な力を生んだ。

ランク：Ｂ＋
種別：対龍宝具
レンジ：１～３
最大補足：１匹

種別でわかるように、龍殺しに特化した宝具であり、龍の属性を持たない相手に使う場合、威力は半分、宝具としてのランクはＤ＋となる。

古塔の頂上にあった理由は、剣の力を認めさせようと祖龍に挑んだが使用者の力が足りずに敗れた為。

形状は一般的だが、長さは二メートル超、色は暗い極彩色である。

現在、ハンターは【真滅一門】に（物理的に）強化している。こちらはランクがＡに上がり、祖龍を殺したことで龍殺しの特性が強化

され、龍に対して即死の追加効果をもつ。（龍の属性を持つ人間や竜には判定で即死）

『龍弓【天崩】』

…芯材に老山龍の角を用いた剛弓。使うには力の強さではなく、心の強さが必要となる。

ランク：A
種別：対人宝具
レンジ：2～99
最大補足：5人

これも、龍殺しの武器だが、封龍剣ほど特化していない為、龍以外が相手でも問題なく使える。

形状は和弓。

最大の特徴は、威力が使用者の心の強さに左右されるというところ。

ちなみに、今回の話の中で、ハンターは防石珠と対魔珠を手に入れました。

第十五話『冬の少女』（前書き）

ＰＶ２０万突破しました！ありがとうございます！！

今回はほとんど、シリアスじゃないです。

ちょっと、ハンターがハッチャケ過ぎてる気がしますが、多分たい焼きのせいです。

猫は甘味を感じないので、キッチンアイルーがつくるお菓子はイマイチだったのでしょう、多分。

アイテムの説明は後書きで。

第十五話『冬の少女』

服を引っ張られた士郎が振り返ると、そこにはバーサーカーのマスターであるイリヤスフィールの姿があった。
「な、おまえは！？」
それを認識した士郎が飛び退くが、
「よかった。生きてたんだね、お兄ちゃん」
イリヤからは敵意も殺意もまったく感じられなかった。だが、彼女がマスターであることに変わりはない。
「まさか、ここでやる気か！？」
ここは商店街であり、時刻は昼過ぎ、人もそれなりにいる。こんな場所であの怪物（バーサーカー）が暴れれば、ここは阿鼻叫喚の地獄と化すだろう。だが、イリヤは、
「え？　おかしなコト言うんだね？　お日さまが出ているうちに戦っちゃダメなんだから」
戦うつもりなどないようだった。しかし、
「じゃあ、一体何の用なんだ？」
「なにって、お話しだよ。わたしね、話したいコトいっぱいあったんだから」
「お話しって、俺とおまえはマスター同士だし、敵じゃないのか？」
士郎がイリヤに疑問をぶつけるが、
「おい、士郎！　たい焼き買うから、金をくれ」
やって来たハンターによって、話の腰が粉砕された。

数分後、三人の姿は近くの公園にあった。士郎はイリヤと話をするつもりのようだが、
「で、なんでハンターまでついて来てるのよ？」
イリヤは不満を漏らすが、
「いや、仮にも同盟結んでるからな、ほっとくワケにもいかねえだ

ろ？」
　ハンターは平然と受け流す。
「そっちが何かしようとしたら、バーサーカーを呼ぶから」
　イリヤがハンターを睨みながら、警告する。
「バーサーカー、か。一度打ち合ってみたいが……」
　だが、明らかに逆効果だったようだ。ハンターのその言葉に士郎が焦る。
「待て、ハンター！　こんな場所で戦ったら……！」
「あぁ、こんな所で戦ったりしねぇよ。それに、嬢ちゃんに手を出す気もねぇ」
　その答えに安堵した士郎はイリヤに向き直る。
「おまえ――たしか、えっと？」
　士郎はイリヤの名前を思い出せないらしい。どうやら、バーサーカーの印象が強すぎたようだ。
「イリヤスフィール・フォン・アインツベルン。でも、長いからお兄ちゃんはイリヤって呼んでいいよ。それで、お兄ちゃんはなんて名前？」
「俺……？　俺は衛宮士郎だけど」
「エミヤシロ（笑み社）？なんか言いにくい名前だね」
「……俺もそんな発音で言われたのは初めてだ。いいよ、言いにくいなら、士郎でいい」
「ふうん、シロウか」
　噛み締めるように、イリヤが口ずさむ。
「……で。話をしようって、なに話せっていうんだ？」
「面白い話ならなんでもいいよ」
　いきなりの丸投げだった。
「でも、さっき話したいコトがいっぱいあるって……」
「あるよ。あるけど、いっぱいありすぎて、どれから話したらいいのかわかんない」
　その答えに士郎が頭を悩ませていると、

「よし、じゃあオレが面白い話を――」
ハンターが話をしようとするが、
「却下。わたしはシロウと話しに来たの」
イリヤに斬り捨てられる。だが、そんなことで諦めるハンターではない。
「わかった、イリヤスフィール。交換条件だ。士郎の分のたい焼きをやろう」
そう言うと、手に持った紙袋からたい焼きを一つ取り出した。
「え？　なにそれ、食べ物？」
イリヤがわずかに興味を持ったようだが、士郎には訊かなければならないことがある。
「ちょっと待て、ハンター。たい焼き、八個買ってたよな？」
「あぁ、士郎と凛に一つずつ、オレとセイバーが三個ずつだが？」
士郎はてっきり、一人二個ずつだと思っていたのだが、
「そもそも、何で俺の分なんだよ？」
「どうせ、士郎は甘いの好きじゃないだろう？」
「確かにそうだけど。……って何で知ってるんだよ？！」
「なぁに、適当に言ったら当たっただけだ。だが、それならこうすればいいだろ」
そう言うとたい焼きを二つに割って、
「ほら、士郎。イリヤスフィールに渡してやれ」
三人の中心にいる士郎に渡してきた。渡された士郎は頭の方をイリヤに差し出す。イリヤは少し戸惑うが、意を決して受け取った。
ハンターも紙袋からたい焼きをもう一つ取り出すと、食べ始める。しばらくして、食べ終えると、
「ところで、イリヤ。もしかして、寒いのか？」
士郎がそんなことを聞く。たい焼きを渡す時に触れたイリヤの手が冷たかったのだ。
「え？　うん、寒い。わたし寒いの苦手なの」
それを聞いたハンターは、

「そういうことは早く言え。待ってろ、今たき火を――」
そう言って、枯れ葉を集めると赤い草（火薬草）や赤いキノコ（ニトロダケ）を混ぜて、固まりかけた溶岩のような石（紅蓮石）を投げ入れた。
次の瞬間、高さ二メートルほどの火柱が上がった。それを見て、ハンターは、
「たーまやー！」
とか言っていたが、
「いや、それ違うから。っていうか、何やってるんだよ！？」
「いや、そこらの葉っぱじゃ湿気ってて、なかなか火がつかないんだよ」
見ると、火の勢いは落ち着いており、ハンターは枯れ枝を放り込んでいた。
「ハァ、公園で勝手にたき火なんかしちゃマズいんじゃないのか？」
士郎がため息を吐くが、
「あったかいね、シロウ」
イリヤは気に入ったようだ。士郎も諦めて、たき火にあたることにした。
「そういえば、イリヤはどっから来たんだ？」
「わたしはアインツベルンのね、古いお城で生まれたの。いっつも寒くて雪が降ってたんだ」
「なら、オレと似てるな。オレが生まれたのは雪山の麓の村だったからな」
それを聞いた士郎は、
「なら、二人とも寒さには慣れてるんじゃないのか？」
「慣れてるけど、寒いのはイヤなの。わたし、冷たいのよりあったかいのが好きだもん」
「オレは十歳ぐらいで一度村から出たし、帰ってからも出掛けてる時間の方が多かったからな。それに一度、賭けの罰ゲームで下着姿で雪山をさまよわされてな……」

「ま、まあ、温かい方がいいよな」
士郎が引き吊った笑みを浮かべる。
「あ、でも雪は好きよ。白くて、わたしと母さまの髪とおんなじだって父さまが言ってたから」
「確かに、イリヤの髪は雪みたいだ」
イリヤの言葉に士郎は同意するが、
「オレは雪も嫌いだな。雪だるまにされたり、あまり良い思い出がないからな」
雪だるまとか言っていたのは、スルーしよう。うん。士郎はそう思った。
「ふん、ハンターなんかには聞いてないもん」
ハンターの言葉がお気に召さなかったのか、むー、と不満そうに口をとがらせるイリヤ。
だが、士郎は先ほどからイリヤに違和感を感じていた。あまりに、無邪気すぎるのだ。このような少女が聖杯戦争（殺し合い）に参加しているのは――
「イリヤ。真面目な話なんだが――」
と。唐突にイリヤが顔をあげた。
「……イリヤ？　どうした、何かあったのか？」
それに気づいた士郎が声をかけるが、
「うん。もう帰らないと。バーサーカーが起きちゃった」
そう言って、イリヤは去っていった。その背中に、
「今度はセイバー抜きでやろうぜ、ってバーサーカーに伝えといてくれ」
ハンターはそう言っていた。

帰り道、士郎がハンターに話しかける。
「なあ、ハンター。今日のことは――」
「あぁ、凛には言わねぇよ。それにオレはイリヤスフィールを殺すつもりはない。例え凛の命令だろうと、子供を殺すのはゴメンだし

な？まぁ、もう一個令呪を使われたら逆らえないがな」
そんな会話をしながら二人は衛宮邸に帰った。

夕食後には四人でライダーを探したが見つからなかった。傷が癒えるまで何処かに潜んでいるのだろう。
そう結論が出された後、帰宅した士郎たちは床に就いた。　だが、気がつくと士郎は家の外に出ていた。意識は朧気で夢かどうかも判別できない。
『おいで』
耳鳴りがする。
『おいで』
意識はそんな状態なのに、その足は何処かを目指している。
『おいで』
これは夢などではないと理解するが、手足の自由は戻らない。
『さあ、ここまでいらっしゃい、坊や』
そうして、たどり着いたのは柳洞寺だった。士郎はその石段を登り、山門をくぐる。
士郎のクラスメイトである柳洞一成を始め、多くの僧職がいる筈のそこに人の気配はない。
その境内の中心、そこには暗いヒトガタの陽炎が揺らめいていた。それは、段々とその境界をはっきりさせ、色を取り戻していく。
そうして出来上がったのは、魔女だった……。

第十五話『冬の少女』（後書き）

と、いうワケで、キャスター登場です。
本ＳＳでの扱いはキャスターは割と良いですが、アサシンは普通です。

本ＳＳのハンターはポッケ村出身です。
火の付け方は雪国の知恵（？）です。紅蓮石の扱いが酷いのは余ってるから。
ちなみに、公園で勝手にたき火をしてはいけません。

以下、アイテム説明

火薬草

…発火作用を秘めた草。

ニトロダケ

…高熱を秘めたキノコ。

以上の二つを調合すると爆薬になる。

紅蓮石

…常温で燃え盛る灼熱の鉱石。その高温で素材同士を結合させる。

別名：鳳凰石

主に鉄製の武具に使用される。

第十六話『月に吠える』（前書き）

サブタイトルはなんとなく。

新しく出てきた二人に苦労して、時間かかりました。

ちなみに、自分はＦａｔｅキャラの中ではアサシン（真じゃないほう）が一番好きです。特に音楽が最高です。

装備説明は後書きで。

それから、後書きのアンケートは締め切ります。

第十六話『月に吠える』

士郎の前に現れたのは紫の衣を纏った魔女だった。そうして理解する。自分を操り、柳洞寺まで誘い込んだのが誰なのかを。

しかし、先程から魔術回路に魔力を流しても体の自由は戻らない。それ以前に、魔術回路がある対象に魔術をかけるというのは難しい。それをこんな遠くから成功させるなど、現代の魔術師には不可能である。つまり、

「キャスターの、サーヴァント！」

「ええ、そうよ。こんばんは、坊や。いえ、セイバーのマスターと言った方が良いかしら？」

キャスターは艶然と告げる。その声には、士郎への嘲りが混ざっていた。

「くっ、一体何のつもりだ！？」

恐らく、キャスターの技量ならば士郎が衛宮邸を出た時点で殺せた筈だ。それをしなかったのは、士郎に何か用があるからだろう。

「あら？　話が早くて助かるわ。

そうね。まず、キャスターのクラスには陣地作成というスキルがあるのだけど、それを使えば遠くの人間から魔力（命）を吸い上げることもできるわ」

「まさか、聖杯戦争に関係ない人達の命を！」

そんなこと、士郎に許容できる筈がない。

「安心なさい。殺してはいないわ。だって勿体ないでしょう？　しばらくすれば、また使えるようになるのだから」

士郎が見れば、境内には膨大な魔力が漂っていた。その全てが人間から集められたモノならば、軽く百人分はあるだろう。

「キャスター、テメエ！」

士郎がキャスターを睨みつけるが、

「それで本題なのだけど。これだけのことをするには優れた地脈が

必要なの。その点、柳洞寺（ここ）は優れているし、外から来るサーヴァントにとっては鬼門にもなる。
けど、守っているだけじゃ勝てないし、バーサーカーという怪物もいる」
　キャスターは意に介した風もなく、話を続ける。
「それと俺に一体何の関係があるっていうんだ！？」
「あら、わからない？　私はセイバーが欲しいのよ。その為に貴方を呼んだの」
　それはつまり、士郎から令呪を奪うということだ。しかし、
「そんなこと……！」
「できないと思う？　だったら、わざわざ呼んだりしないわ。大丈夫、魔術回路ごと令呪を引き剥がすだけだから死にはしないわ。もっとも、普通じゃいられないでしょうけど」
　そう言って、キャスターの右手が伸びてくる。士郎にはその手を止める術はない。
　だが、キャスターの手が士郎に届く直前、青い砲弾が降ってきた。

　話は十分前まで遡る。
　セイバーは士郎の部屋から出ている魔力に気づいて目を覚ました。だが、その部屋に人の気配は無い。その異常に気づいたセイバーが襖を開ける。その先にあったのは外から伸びる一本の糸だけだった。それを見たセイバーはすぐさま別棟に向かった。

　数分後、セイバーとハンター、凛の姿は民家の屋根の上にあり、それを足場に跳躍を繰り返していた。
　といっても、凛にそんな真似は不可能なので、ハンターにお姫様抱っこされている。その凛は着替える時間がなかった為、猫のプリントがされたパジャマに赤いコートを羽織っているだけだ。
　対するハンターは白い毛皮があしらわれた軽装の皮鎧『キリンX（ガンナー）』を身につけている。その足には紫電が走り、空中を跳ぶ間も大気を

蹴って加速している。
なかなかに目立つのだが、深夜である上、この速度なら問題ないだろうと判断する。
ちなみに、『キリンX（ガンナー）』には装飾品として運搬珠が装着されており、今のハンターなら凛を抱えたままでも、セイバーの速さに追従することができる。

これは完全な余談だが、後に冬木市で新たな都市伝説が誕生する。
その内容は、白く輝く変態超人が美少女を赤い布にくるんで誘拐するというモノであったとか。

そんな跳躍の中、凛が声をあげる。
「結界をすり抜けて、魔術回路を持ってる士郎に魔術をかけたというコトは――」
「ええ、相手はキャスターでしょう。しかし、解せません」
士郎が屋敷を出た時点で殺せた筈なのに、わざわざ自らの拠点まで誘導している。
仮に、そのことに何か意味があるのだとしても、キャスターがセイバー（天敵）を引き寄せるなど自殺行為だ。
「だが、行くしかないだろ？　それより、セイバー。ひょっとして、士郎がいるのはあそこか？」
そう言うハンターの目線の先にあるのは、月を背後に闇の塊と化した円蔵山。その頂上には柳洞寺が建っている。
「はい。しかし、あそこは……！」
円蔵山には、自然霊以外を排除する結界が張られていた。それもかなり強力なモノであり、サーヴァントといえど、侵入は難しい。
だが、ハンターから降りて結界を調べていた凛が唯一の突破口を見いだす。
「そのコトなら大丈夫よ。正門と中に結界は張られてないから。けど……」

当然、唯一の侵入路である正門には何らかの手を打っている筈だ。そう思った三人は警戒しながら進むが、もう少しで山門という所まで何事もなくたどり着いた。
しかし、権謀術数を得意とするであろうキャスターが何の準備もしていない筈がなかった。そうして、ソレは予想の上を行く形で現れる。即ち、
「ッ！　キャスターじゃないサーヴァント！？」
そう言う凛の視線の先に現れたのは群青の着物を身に纏い、右手に五尺余りの大太刀を握った美丈夫である。
「如何にも。私はアサシンのサーヴァント、佐々木小次郎」
この英霊は異常だ。自ら真名を明かすなど、バカげているとしか言いようがない。しかし、
「なら、オレも名乗らせてもらおうか？」
バカはもう一人いたようだ。
「やめなさい、ハンター！！」
凛が止めるが、ハンターの口には何故か令呪が効かない。その証拠に、
「オレはカプコン。ハンターのサーヴァントだ」
それを聞いてセイバーまでもが、
「二人とも名乗ったとなると、私だけ名乗らないのは騎士の礼儀に反します……」
そう言って、キッとアサシンを見て口を開きかけるが、
「セイバー、オマエは士郎を迎えに来たんだろう？　なら悪いが、小次郎の相手はオレに任せてもらう」
それはハンターに止められる。その会話を聞いていたアサシンが、
「ほう、ここを通りたいのか。しかし、私はこの山門の門番を任されていてな、通す訳にはいかんのだ」
状況はあまり良くない。山門にはアサシンがおり、境内には恐らく士郎とキャスターがいる。
アサシンといえども、この地形とその武器から難敵となり、突破

は難しい。だが、
「なぁ、小次郎。それは山門に近づかない限り、何もしないってコトか？」
ハンターがそんな質問をした。それを聞いて、凛とセイバーは頭の上に？マークを浮かべている。
「ああ、近付かぬ限り、こちらから手は出さぬ」
それを聞いて、キリンを模した仮面により、下半分しか見えないハンターの表情が笑みを浮かべると、鎧を変える。
『キリンX（ガンナー）』が消えて現れたのは赤に白の縞が入った鎧『ザザミS（剣士）』。アメフトのプロテクターのようなソレを構成するキチン質の甲殻には、硬質な感じはあっても、重量感はない。
「で、士郎はどっちだ、セイバー？」
新しい鎧を装備したハンターがセイバーに問いかける。今度は目の周りが見えるようになったのだが、その目はいたずらっ子のように輝いていた。
「この階段を真っ直ぐ行った先ですが……」
セイバーが答えると、ハンターは「そうか。」とか言って、セイバーの後ろに回ってその両足を掴んだ。
「ハンター？　何を！？」
「ちょっと、何やってるのよ？！　ハンター！」
セイバーと凛の疑問はもっともだが、当のハンターはセイバーを持ち上げ、回転し始める。そうして出来上がるのは、セイバーを弾に見立てたハンマー投げだ。
「セイバー！　微調整は自分でやってくれ！！」
そう言って、ハンターは手を離す。結果、セイバーは山門の遥か上を飛んで行く。
アサシンは手を出さない。出せないのではなく、出さない。
「何で！？」
セイバーを見送ったアサシンに凛が問うが、答えは自らのサーヴァントから返ってきた。

「オマエも損な性格してるな、小次郎」
「ふむ。しかし、一度言った事を翻すなどという無粋な真似は出来ぬ。
それに、それはかぷこんやセイバーも同じであろう？」
「オレは損なんて思ってないぜ。小次郎、オマエと一騎打ちができるんだからな」
「ほう、嬉しいことを言ってくれる。セイバーの剣気もなかなかだったが、お主の闘気も楽しみだ」
確かに、この状況（狭さ）では凛は援護できない。しかし、
「ハンター、アンタまさかわざと――」
この状況を作り上げたのか、と訊こうとした凛だが、それは中断される。何故なら、ハンターが再び鎧を変えたからだ。
現れるのは、黄色い陣羽織と一体化したような蒼い鎧を身に着けた鎧武者だった。

こうして、話は最初に戻る。
青い砲弾であるセイバーは、空中で『風王結界（インビジブル・エア）』と『魔力放出』を使って軌道を調整し、キャスターに斬りかかった。
それを何とか避け、空に逃れるキャスターだが、その隙にセイバーは士郎を操る糸（魔術）を断ち切る。

今、柳洞寺には四騎のサーヴァントがいた。
山門にアサシン、その少し下にはハンターが。
境内にはセイバー、その上空にキャスターが。
――月光の下、戦争が始まる……。

第十六話『月に吠える』（後書き）

キリンX（ガンナー）

…幻獣キリンの素材で作られた防具。
ゲーム上では表現されないが、雷が走り装備者を守る。
また、独自設定として、敏捷が１ランクアップ。

鎧としては露出が多い。女性版は人気だが、男性版はそれほどでもない。多分、頭部のせい。
現代の基準なら、間違いなく変質者。

ランク：Ａ

以下、付加技能

属性攻撃強化：Ｃ

武器の属性攻撃力が１．２倍になる。

ランナー：Ｂ

走行と一部行動で消費するスタミナが半分になる。

精霊の加護：Ｄ

２５％の確率で、受けるダメージが７０％になる。

全耐性－は装飾品でキャンセル。

また、運搬珠により運搬の達人：Ｃも発動。

ザザミＳ（剣士）

…盾蟹ダイミョウザザミの素材を使った鎧。

防御に特化した作り。

耐久が１ランクアップする。

外見はアメフトとかの防具に似てる。

ランク：Ｄ＋

付加技能は、

防御技能：Ｃ

盾を使って防御しきれる攻撃のランクが１つ上昇する。

投擲技術：Ｃ

言葉通り。セイバーを投げる際に使用。

最後に出てきたのは、次回。

アンケートは締め切りました。多分、優柔不断なことになると思い

ますが、お許し下さい。

第十七話『空を切り裂く刀』（前書き）

いやぁ、大分ほったらかしにしてました。誠に申し訳ない。
「だが、私は謝らない（キリッ」
嘘です。謝ります。ゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイ。
いつも通り、設定はあとがきで。

第十七話『空を切り裂く刀』

向かい合う、侍（アサシン）と鎧武者（ハンター）。
「……なるほど。かぷこん、お主も日本の英雄という訳か？」
その姿を見たアサシンが確かめるが、
「いや、オレの生きた時代に日本なんて国はねぇ。文化だけなら、東方に残ってるらしいがな」
凛が見た未来からすれば、文化が残っているだけでも幸運だろう。しかし、
「……ハンター、それ以上何か言ったら、ガンド撃つわよ？」
何故、この男は秘密にしておくべきことをペラペラと喋るのだろうか？
「まぁ、凛もこう言ってるし、そろそろ始めるか？　小次郎」
そう言って、宝具から蒼い太刀――『龍刀【劫火】』を取り出し、左腰に固定するハンター。
それは、アサシンのものよりも分厚く広い刀身を持ち、峰には牙のような突起が並んでいる。
「ほう。私以外にも、このような長刀を使う者がいるとは……」
アサシンのその言葉に、ハンターが好戦的な笑みを浮かべる。
「正確には太刀っていう名前なんだがな。それに割とメジャーな武器だぜ、コレ」
左手で鞘を持ち、右手で柄を握ったハンターが、一歩一歩アサシンに近づいて行く。その構えは抜刀術のものだ。
そして、両者の間合いが重なる。――刹那。大気が悲鳴をあげた。
先手を取ったのはハンターだった。左下から右上へと至る、音速超過の居合抜き。しかし、その刃はアサシンには届かない。
驚くべきことに、アサシンは自らの刀を使い、ハンターの一閃を受け流したのだ。
言っておくが、これは簡単なことではない。同じ様な形の武器を

使っている両者だが、その硬度は全く違う。アサシンの刀が鉄製であるのに対し、ハンターの太刀は巨大龍の角から削りだした物である。

武器の優劣を言えば、火縄銃と現代のアサルトライフルぐらいの差はあるだろう。さすがに、鎧の隙間や剥き出しの顔面、首ならば斬れるだろうが。

つまり、そんな脆弱な武器（備中青江）で、腕力に優れるハンターの全力の一撃を防いだのだ。その技量は最早、人外の域に達している。

「ふっ」

未だ、太刀を返せていないハンターに対し、アサシンの一撃が迫る。水平に振るわれる一刀が狙うのは首だ。

「ぬぉっ！？」

その一撃をハンターは左腕の篭手で流す。その間に体勢を整えたハンターは、再び太刀を振るう。今度は右上から左下へと叩きつける軌道。

しかし、その一撃もアサシンに受け流される。だが、それも当然だろう。先程の居合い抜きは『暁丸・極』の付加技能である『抜刀術』により、強化されていたのだ。その一撃を防げて、今の一撃を防げないワケがない。

そうして、再びアサシンの刀が振るわれる。やはりと言うべきか、狙いは首。その軌道に肩当てを割り込ませ、強引に防御したハンターが口を開く。

「さすがは侍だな、小次郎。オレの首を斬って、干し首にして部屋に飾るつもりか？」

なにやら、フザケたことを口走った気がする。ハンターの日本という国に関する知識は大丈夫なんだろうか？

とにかく、日本人として、この間違いを放置できない。それはアサシンも同じ――

「いやいや、かぶこん。干し首など飾らん。飾るなら髑髏だ」

――じゃなかった。ずっこけそうになる凛を背景に、ハンターとアサシンの会話は続く。もちろん、二人とも手は緩めずに、だ。
「それに、敗北したサーヴァントは消滅するのだ。首など残るまい」
「じゃあ、なんで首ばっかり狙ってんだ？」
確かに、今までのアサシンの斬撃は、全てハンターの首を狙っていた。それは“殺す為だけ”の剣だ。
「いや、済まぬ。生憎、私の剣は邪道でな。だが、かぷこんの剣も正道ではないだろう？」
まあ、アサシンのあれが正道でないのは確かだろう。言うなれば、常人の理解を超えた技巧による空中歩行といったところか。
「残念だが、オレは剣術なんて知らねぇ！」
だが、ハンターの剣に道などない。あえて例えるなら、無道という表現が正しいだろう。
どこまでも実戦主義な即興の闘技。それがハンターの戦い方だ。

高速で流れる小次郎の視線の先、太刀の峰を蹴り飛ばすことで加速させた斬撃が迫って来る。
なんとかその一撃を受け流すが、流されたかぷこんの太刀は減速することなく石段脇の木を切断する。
かぷこんは戦いをはじめてから一度も、太刀が木や石段に激突しようが減速しない。そのことを小次郎は怪訝に思う。
仮に、小次郎の備中青江があの速度で石段にぶつかれば、折れるか刃こぼれして使いものにならなくなる。
確かに、『龍刀【劫火】』の強度からいえば、研げば直る程度の刃こぼれで済むだろう。だが、それにも限度がある筈だ。
「ハァッ！！」
そんなことを考えていると、かぷこんが大上段の一撃を叩きつけてくる。それを流せば、石段に激突するのは必定。
そして、飛び散る石段の残骸に蒼い欠片が混じっていたのを小次郎は見逃さなかった。

「チッ！」
それはかぷこんも同じようで、舌打ちとともに大きく下がる。小次郎の殺傷圏外へと。
一瞬、追撃しようとした小次郎だが、すぐに思いとどまる。自分はこの山門から離れられないのだ。
「もう使えねぇ斬れ味かよ……。仕方ねぇ、戦法を変えるぞ、凛？」
そう言って、かぷこんは『龍刀【劫火】』を『狩人の歩み（アイテムボックス）』に仕舞った。

凛が見る限り、アサシンがハンターに対して勝っているのは敏捷と技術だけだ。そして、敏捷の差は決定的なものではない。
逆に、筋力と耐久、武器において、ハンターはアサシンを圧倒している。だが、未だ有効打を与えられていない。
これはアサシンの圧倒的な技量の為だ。剣技だけならばセイバーをも凌ぐ暗殺者など理解不能だが、目の前にいるのだから認めるしかない。
「まぁ、一本で駄目ならこうするか」
そう言って、太刀を“二本”取り出す。現れたのは、黄と青の縞模様の鞘に橙の布が巻かれた『鬼哭斬破刀・真打』と白銀に水色の装飾がされた鞘を持つ『氷刃【雪月花】』の二本。
右手に『鬼哭斬破刀・真打』、左手に『氷刃【雪月花】』を握り、鞘だけを宝具に戻す。『龍刀【劫火】』と違い、どちらの刀身もオーソドックスな日本刀のものだ。
そうして出来上がったのは、超長刀の二刀流。
そういえば、佐々木小次郎を倒した宮本武蔵も二刀流の使い手だったという。しかし――
「……ねえ、ハンター。何で接近戦にこだわるワケ？　アンタ、大砲みたいなの持ってたでしょ。それで吹き飛ばせばいいじゃない」
わざわざ、相手の得意な間合いで戦う意味など無い。接近戦が得意な相手ならば、遠距離から一方的に狙撃。遠距離戦が得意な相手

なら、張り付いて叩けば良い筈だ。
　それを聞いたハンターは凛に振り返る。その目は、非難の意志が篭められた半目だ。何故か、アサシンも呆れたような目で凛を見ている。
「な、なによ？　言いたいことが有るなら、言いなさい！」
　狼狽える凛だが、さっきの発言は間違いなく正論の筈だ。
「……いいか、凛。確かに、効率“だけ”を重視するならそれでいいだろう。だが、それじゃあ面白味に欠ける」
　ハンターから返ってきた答えは、凛の予想の斜め上どころか、別次元だった。数秒ポカーンとしていた凛だが――
「アンタ、ふざけてんの！？　聖杯戦争（殺し合い）に面白いも面白くないもないでしょ！！」
　まったく以て、正論。正論なのだが、戦闘狂（バトルマニア）には正論など通用しないようで……。
「古今東西の英雄が参戦するのが聖杯戦争だ。
これを逃せば、こんな機会二度とないだろう。だったら、楽しまなきゃ損じゃねぇか」
　そういえば、ハンターが聖杯戦争に参加した目的は“戦闘”だった。ならば、それに関わることで己の意志を曲げはしないだろう。
「はあ……、わかったわよ。でも、それで確実に勝てるんでしょうね、ハンター？」
　遠距離狙撃（確実に負けない方法）を捨てるのだ。必勝なんてモノが現実にあるとは思わないが、勝ってもらわなければ困る。
「さぁな？　それは小次郎の宝具次第だろう」
　だが、ハンターの答えは現実的なモノだった。確かに、宝具によっては、最悪の相性であるキャスターがセイバーを打倒することさえあり得る。
　それでも、凛はハンターに釘を刺しておく。
「まあ、いいわ。好きにやりなさい、ハンター。……けど、負けたら許さないわよ」

アサシン相手に負けるということは、首を絶たれるということだ。そうなれば、流石のハンターでも消滅する。
許すも許さないもない筈なのだが、それでもハンターは応える。
「了解だ。なぁに、期待には応えてみせるさ、凛」
そんな軽口じみたやりとりをしていると、「ふっ」という笑い声が聞こえてきた。凛は、その発信源――アサシンを睨む。
ちなみに、アサシンは凛とハンターの会話中、何の手出しもしてこなかった。
そういえば、ハンターが退いた時、一瞬追撃しようとして止めたのだ。確実な好機だった筈なのだが……。
まるで、山門に近付いた敵しか攻撃“しない”のではなく、攻撃“できない”かのように。
そんなことを考えていた凛の目つきは非常に悪かった。人を呪い殺せそうな程に。それに耐えかねたのか、アサシンが笑った理由を語り出す。
「何、許してくれ。馬鹿にした訳ではない。なかなか良い主従だと思ってな。
ちなみに、さっきの話だが、安心しろ。私には宝具なぞ無い」
真名の暴露に次ぐ、本日二度目の爆弾発言が炸裂した。唖然とする凛と何かを考え込むハンターを余所に、アサシンは言葉を続ける。
「私が持っているのはこの刀と、燕を斬ろうと編み出した大道芸の二つだけだ」
その言葉に凛が思い至る。
「……燕返し！」
佐々木小次郎を象徴する剣技にして、詳細不明の秘剣。名前しか明らかになっていない正体不明の剣技を前にして、
「大道芸か。なら、見せてもらおうじゃねぇか」
ハンターは、まるで散歩にでも行くかのように山門へと歩き出した。
そうして、再び流れ始める。三つの金属がかき鳴らす狂争曲が。

ハンターの眼前、連続で叩き込まれる二刀を前に、小次郎はよく対応している。
二刀流になったことで手数は二倍になった。先程に比べれば威力は落ちるが、小次郎を両断するには十二分だ。
それを捌き、時折反撃さえしてくる技量は、驚愕を通り越して賞賛に値する。しかし――、
「燕返しはまだか？　小次郎！」
ハンターが見たかったモノが出てこない。
「使いたいのは山々なのだが、雌狐に止められていてな。“使わなければどうにもならん状況”でなければ使えんのだ」
それを聞いて、ハンターは「ハッ」と笑った。「じゃあ、これでどうだ！？」
その言葉と同時に、ハンターの武器に変化が起きる。『鬼哭斬破刀・真打』が青白い雷光を、『氷刃【雪月花】』が空気中の水分を凝固させた細氷を纏う。

常識外の現象を発生させるかぷこんの太刀に対して、『心眼（偽）』が告げる選択は、この聖杯戦争で初めてのものだった。即ち、小次郎は一つ上の石段へと後退したのだ。
さっきまで小次郎がいた場所を通り過ぎる雷刃と氷刃。目に焼き付く雷光と肌で感じる急激な気温の低下。それが、後退が正解だったと教えてくれる。
最早、刃を合わせることは不可能。そんなことをすれば、雷撃に意識を奪われるか、極低温に青江を砕かれるかの二択しかない。
尚も追撃してくるかぷこんに、小次郎は笑う。
後退しなければ回避不能。当然、受け流しも不可能。
ならば、些か足場が狭いが使うしかない。幸い、かぷこんの次撃までは僅かながらも余裕がある。
今まで構えをとらなかった小次郎が初めて構える。身体を捻るよ

うな構えを。
「秘剣――」
殺気が凝縮し、
「――燕返し！」
その魔剣を前に、世界が割れる。

第十七話『空を切り裂く刀』（後書き）

こんなこと言えた立場じゃないですが、活動報告にもレスくれると嬉しいです。
嘘予告とか、いろいろ書いてるので。

以下、武器解説

『龍刀【劫火】』

…龍を憎む妖刀。属性は龍。形状は本文で述べたので省略。

ランク：A
種別：対龍宝具
レンジ：1～10
最大補足：1匹

龍にしか真価を発揮できない宝具その2。ただし、こちらは竜相手でも能力が劣化しない。

効果は一刀両断とでもいうべきもので、刀身の長さが足りなくても対象（ドラゴン限定）を両断できる。
だが、刀身が伸びる訳ではなく、与えた傷が両断になる効果なので、近付かなければ当たらない。また、弾かれたり、レンジ以上なら無効。

『鬼哭斬破刀・真打』

…鬼の異名を持つ剣士の愛刀。その剣士が弟子の策に散った後、多くの人間の手を渡り歩いてきた妖刀。属性は雷。

ランク：B＋
種別：対人宝具
レンジ：1～3
最大補足：1人

効果は電撃。一見普通だが、近接戦に於いては万能にして強力。たとえ、武器越しでも触れれば痺れる。柄には絶縁加工がしてある。

ちなみに、ハンターが持ってるのはオリジナル。

『氷刃【雪月花】』

…東方伝来の技術が用いられた太刀。属性は氷。

ランク：B
種別：対人宝具
レンジ：1～3
最大補足：1人

凍結能力では『氷牙』に劣るが、武器自体の射程と威力で勝る。

『暁丸・極』

…老山龍亜種――通称、岩山龍の素材で作られた鎧。究極の素材と匠の業の結晶。
どう見ても武者。

ランク：A
種別：対人宝具
レンジ：―
最大補足：１人

以下、付加技能。

『抜刀術：A』
…抜刀攻撃の速度が上昇。Aならば、約二倍。

『回復加速：B』
…傷の治癒速度が二倍になる。

『匠：A』
…装飾品により発動。効果は斬れ味上昇。詳しくはアカムトの説明に書いてます。（絶対強者のあとがき）

気絶倍加は装飾品で打ち消し。

次話は一週間以内に書き上げます。

第十八話『空を切り裂く刀ＩＩ』（前書き）

一応、予告期限に滑り込みセーフです。

なんか、ご都合主義みたいな戦闘シーンになってる気がしますが、お許し下さい。

後、『タイガー道場』的なものを考えてるのですが……。

いつも通り、解説はあとがきです。

第十八話『空を切り裂く刀II』

膨れ上がる殺気。
「秘剣――」
解き放たれる必殺の魔剣。
「――燕返し！」
まず、ハンターが認識したのは頭から股に至る縦の“一撃”。
それだけなら何の問題も無い。確かに威力とキレはさっきまでとは段違いだ。鎧があるとはいえ、直撃すれば即死だろう。
しかし、太刀を捨てれば籠手は間に合う。さらに、腕を捨てる覚悟さえあれば、軌道をずらすことも可能。
後は残った片腕で小次郎の命を狩ればいい。そう、“一撃だけ”ならば……。
「何っ！？」
目に写るのは“もう一組”の腕と長刀。縦の一撃と“全く同時に”振るわれるそれは、円の軌跡を描く。当然、その中にはハンターの首も収まっている。
こうなっては、ハンターが選択できるのは回避のみだ。左足が地を蹴る破砕音と共に、手足を丸めて右方向に転がる。一回転したところで、両足を使って勢いを殺すと後方に跳躍する。
着地したのは、小次郎と凛のちょうど中間。もちろん、小次郎の殺傷圏外である。

今、アサシンの『燕返し』により起こった現象を凛は知っていた。
「まさか、多重次元屈折現象（キシュア・ゼルレッチ）！？」
それを聞いたハンターが問い掛ける。
「凛が知ってるってことは、そのキシュア・ゼルレッチっていうのは魔術なのか？」
その言葉に、凛は一度アサシンを睨むと、忌々しげに語り出した。

「魔術？　舐めてんじゃないわよ！　魔術っていうのは、現代の技術でも実現可能なモノをいうの。
多重次元屈折現象（キシュア・ゼルレッチ）は魔法っていう不可能の領域よ！」
　途中まで首を傾げていたハンターだが、最後の話を聞き、「ポン」と手を叩く。
「つまり、小次郎は魔法使いってことか？」
　事実だとしたら、なかなか斬新だがそれはない。何故なら、
「それはないわ。魔力を感じなかったもの」
　しかし、それこそが最大の疑問だ。魔力を用いず、魔法域の現象を起こせる筈はないのだが。
　そんなことを考えていると、アサシンが口を開いた。
「きしゅあ・ぜるれっち……。ふむ、燕返し（この技）にそのような名前があったとは。
教えてくれたこと、感謝しよう。かぷこんのマスターよ」
「感謝してるなら教えて欲しいんだけど、その技どうやって覚えたの？」
　これは“遠坂”凛として、是が非でも訊かなければならない質問だ。
　遠坂家が目指しているのは、他ならぬ第二魔法『平行世界の運営』である。
　多重次元屈折現象（キシュア・ゼルレッチ）は第二魔法の領域だ。というより、第二魔法の担い手の名前が『キシュア・ゼルレッチ・シュバインオーグ』なのだが。
　閑話休題、本筋に戻ろう。
「いや、燕を斬ろうと思ったのだが、これが存外難しくてな。
しかし、他にやることも無かったのでな。一念鬼神に通ずと言うべきか、続けておればできるようになっておった」
　その言葉に凛は絶句する。遠坂六代の全てを、たった一人で凌駕しているのだ。そういえば、大道芸とか言ってた気もする。
　さらに、ハンターが追い討ちをかける。

「だが、さっきのは“完全な”燕返しじゃねぇだろ？　小次郎」
その言葉にアサシンは口を弓にする。
「ほう、気づいたか」
「あの構えから予測できる攻撃は三種類だった。そして、その三つが同時に放たれれば、回避は不可能だ」
多重次元屈折現象による同時三重斬撃――それが燕返しの正体だった。

ハンターは燕返しの対処方を考えていた。
さっき言ったように回避は不可能。かといって防御しようにも、腕が二本である以上防げるのは二撃までだ。
回避と防御の両方を行うというのも無理だ。回避後の不安定な状態で防ぎきれる威力ではない。
さて、どうするかと考えていると、
「ふ、ふフフふふフふふふっ！　暇だからやってたらできた？」
凛がコワれた。額に右手をあて、身体を仰け反らせながら狂ったようにワラっている。
やがて、ギラギラと輝く死んだ目というよく解らないモノをハンターに向ける。
「……ハンター。アサシンを生け捕りにしなさい！！」
一瞬、命令の意味が理解できなかったハンターだが、即座に己をアジャストする。
「おい凛、小次郎を生け捕りにしてどうするつもりだ？」
「決まってるじゃない。解ぼ――、検査するのよ」
今、解剖と言いかけた気がするが、多分気のせいだろう。いや、きっと気のせいだ。
「拒否権は？」
答えは分かりきっているが、とりあえず訊いておく。
すると、凛は（ギラギラした死んだ目もセットで）とびっきりの笑顔を作る。

「……令呪、使うわよ？」
これはダメだ。もう止まらない。
「あー、小次郎。悪いんだが、次で終わりでいいか？」
かなり無茶苦茶なことを言っているのは自覚している。だが、完全な燕返しを見るにはこれしかないのだ。
今は「ハリー（急げ）！　ハリー！　ハリー！」とか言ってる凛だが、冷静になれば小次郎の行動範囲に気づく筈だ。そうなれば、遠距離攻撃を要求してくるに違いない。
「よかろう、こちらこそ望むところだ。さあ、次で終幕としようぞ」
それは小次郎も理解しているようで、石段を降りてくる。逆にハンターは石段を昇っていく。
そして、四メートル弱の間隔を開けて、ハンターと小次郎が同じ段に立つ。

さて、どうなるか。小次郎はそんなことを考えながら刀を構える。
少なくとも、無策という訳はないだろう。
「悪いが、手段は選ばねぇ。勝ちにいかせてもらう！」
そう言うと、左手の氷を纏う太刀を収納する。代わりに取り出すのは三つの玉だ。
大きさは直径五センチメートルほど。そして、三つの玉はそれぞれ白、灰、黄のテープで巻かれている。おそらく、それがかぷこんの選んだ切り札なのだろう。
「さあっ！　始めようぜ、小次郎！！」
言葉と同時に、三つの玉が放られる。
まず感じたのは閃光。視覚が灼かれるのを防ぐ為、腕で顔を隠す。
続いて発生するのは白いカーテン、煙幕だ。これで完全にかぷこんを見失った。
故に、使えない視覚を補おうと聴覚に神経を集中させる。だが、これがいけなかった。最後の玉が解き放ったのは極大の高音。

結果、小次郎に残されたのは閃光が消えたことで戻った視覚のみ。しかも煙幕により、有効視界は二メートルほど。
かぷこんは閃光も高音も防いでいる筈だ。この状況では、聴覚は視覚よりも重要。
これでは、待ち構えるしかない。
「ぬっ！？」
そんな小次郎の正面に黒い影が出てくる。出てきた方向から考えて、かぷこんであるのは間違いない。
だが、小次郎が僅かに反応した瞬間、影は再び後方に消える。
その行動の意味が理解できず、訝しんでいた小次郎だが、答えが出る前に変化が起きる。煙幕が薄まり、聴覚が戻ってきたのだ。
おかげで、視覚が三メートル前の蒼い鎧の人型を捉える。
「何をするつもりだったのかは知らぬが、これで仕舞だ！　秘剣、燕返し！！」
そして、小次郎は必殺の魔剣を放つ。三つの斬撃は鎧をバラバラに斬り裂き、剣圧は煙幕を吹き飛ばす。
「空蝉だとっ？！」
しかし、その刀は鎧以外の何も斬らなかった。斬ったのは中身の無い鎧だけだ。ならば、中身は何処に行ったのか？
答えは耳が教えてくれた。鎧の残骸が落ちた時の耳障りな音に混じって、地を蹴る音が聞こえたのだ。
音の発生源――上段に視線を向ければ、居た。
光学迷彩の処理が追いつかないのか、人型に背景を歪ませる存在が。おそらく、先程まで背景に完全に同化していたのだろう。
小次郎に発見されたことに気づいたのか、光学迷彩が解かれる。現れるのは橙色の、童話に出てくる魔法使いのような姿――『ミヅハ真』を纏った狩人。
そして、その手に振りかぶられるのは、黒い巨大な板に柄が付いた木刀――『龍木の古太刀【神斬】』だ。
今の小次郎は燕返しを放った直後で刀を返せない。となれは、選

択肢は回避しかない。
後方に跳躍する小次郎の前を木刀が上から下に抜けて行く。
木刀を避け、着地した小次郎の額を汗が伝う。今のは危なかったが、確実に避けられた。
「小次郎、敗れたり！」
だというのに、かぷこんはそんなことをのたまった。
「何を……？ゴフッ！？」
当然、意味など分からない小次郎だったが、答えはすぐに与えられた。自分の体から吹き出す鮮血という形で。
「……なるほど。斬れるのは刀身だけではない、ということか」
「あぁ、便利だろ。オレは気刃って呼んでるんだけどな。コレとは特に相性がいい」
「だが、浅かったな。この程度では私はまだ死なぬ」
その証拠に口から血を流しながらも、小次郎は普通に喋れている。
「まさか、聞いてなかったのか？　凛が言ってただろ。生け捕りにする、と」
「だが、私はまだ戦え――っ？！」
再び、刀を構えようとした小次郎だったが、異変に見舞われる。
「おっ？　効いてきたか？」
体が痺れて力が入らないのだ。
「まさか……、毒、だと……！」
「なぁに、安心しろ。麻痺毒だから死にはしねぇ」
会話の最中も毒は回り、挙げ句の果てには刀を取り落とす始末。
視界の隅で愛刀が石段に落下し、乾いた音をたてた。

うまくいった。ハンターはそう思っていた。ハンターが立てた作戦はこうだ。
まず閃光玉・煙玉で視覚を、音爆弾で聴覚を殺す。
その上で『暁丸・極』を囮として設置し、『ミヅハ真』で姿を隠

すことで燕返しを誘う。
後はその隙を見逃さず、奇襲を叩き込む。
結果として作戦は成功し、小次郎は麻痺している。――と、
「何やってんのよ！？　ハンター！　さっさと捕獲しなさい！！」
ハンターが小次郎を破ったと知った凛が急かしてくる。
「あぁ、分かってる。ったく……」
嫌々ながらも、ハンターは直径約三十センチメートルの円盤状の装置（シビレ罠）と赤いテープで巻かれた玉（捕獲用麻酔玉）を取り出す。
「悪く思うなよ、小次郎。なぁに、解剖はされないだろう。少なくとも、“オレは”そう信じてる」
そう言って、小次郎の許に向かおうとした時――、
「避けて下さい、ハンター！」
セイバーの声と無数の魔力弾が降ってきた。

第十八話『空を切り裂く刀ＩＩ』（後書き）

全部一緒で書くだけ無駄なので、鎧はランクしか書かないことにします。

『ミヅハ真』

…霞龍の素材を用いた装備。古の錬金術師の装束を模した逸品。三角帽子のせいで、魔法使いっぽい。

ランク：Ａ。『トヨタマ真』の剣士バージョン。
スキルも『トヨタマ真』と同じ。故に省略。（『トヨタマ真』の解説は『絶対強者』のあとがきです）

『龍木の古太刀【神斬】』

…はるか古代の龍木（ヤマツカミに生えてる木）から作られた木刀。

ランク：Ａ
種別：対人宝具
レンジ：１～５
最大補足：一人

複数の能力を秘めた便利宝具。
？名称通りの対神属性。（神性が高いほど威力上昇）
？　斬った対象の魂の浄化。
？気刃による刀身の延長。※他の太刀でも気刃は使えるが、威力が

上がるだけ。刀身は伸びない。
?麻痺毒の注入。当たったのが気刃だけでも有効。（効きやすさは耐久のステータスに左右される）

後、アイテムの見た目がゲーム中と違いますが、分かりやすさ重視ということで。

では、また一週間後にはお会いしましょう。

番外『タイガー訓練所』（前書き）

※今回は本編じゃありません。また、過度のネタ・メタを含みます。
6月9日から自動車教習に合宿で来てて、資料不足なんです。
フザケまくった内容ですが、許して下さい。

ちなみに、今回は装備説明は無しです。

後、感想貰えると嬉しいです。っていうか、ギャグの評価って自分じゃ全くできないので……。

番外『タイガー訓練所』

衛宮邸の道場に“よく似た”空間、その中心に二つの人影があった。
「……ついに！　ついにこの時が来たな、弟子一号！！」
道着を着た、ショートカットの女性――タイガが吼える。
「はい、師匠。バッドエンドが存在しないこのルートでは師匠の出番が激減してますからね」
それに、何故かブルマを履いた小柄な少女――ロリブルマことイリヤが応える。
「そうなのよぉ……。でも、このコーナーを足がかりにメインヒロインの座を奪い取ってやるぅ！」
イリヤが言った『激減』という言葉にテンションが落ちるタイガだったが、すぐに持ち直す。
「まあ頑張って下さい、師匠。……無駄だとは思いますが」
「えッ？！」
しかし、タイガのテンションは再び沈められる。しかも、今度は重り付きだ。
「作者の予定では、マトモな師匠の出番は後一回なんです。しかも、セリフ無し」
「ぬぅあんですとぉぉおおぉーーー！！？」
否、タイガのテンションは一周回って成層圏を突破していた。
「出てこい作者！　この話、一から考え直させてやる！！」
その怒りの矛先は、当然ながら作者に向けられている。
「あの～。作者ならそこに居ます」
そう言ってイリヤが指差す先にあるのは、一辺二センチメートル程の小さな立方体。サイコロだ。ただし、●ではなくKの字で数が表されている。
「なぁにいぃ！」

タイガは鬼気迫るというより、鬼そのものとしか表現できない表情で“こちら”を睨む。余りにもいたたまれないので、挨拶してみた。
「どうも、作者のサイコロKです。本日はお日柄も良く――、痛い！　砕けます！？」
だが、挨拶は激痛により中断される。タイガが指で擦り潰そうとしてきたからだ。
「うわぁーーん。いっそ粉になっちゃえ！」
怒っていたと思ったら、今度は泣き出した。
「まあまあ、師匠。この空間を創り出したのは作者みたいですし、目的ぐらい訊いてみたらどうでしょうか？」
イリヤの言葉で、少し冷静になったのか。タイガの力がゆるむ。
ただし、未だに相当の力がかけられているが。
「何で、タイガー道場をやる気になったの？」
僅かに、希望を込めた視線を向けてくるタイガ。だが、事実とは残酷なものなのだ、多分。
「いや、やる気になったというか……。自動車教習で忙しいので、繋ぎにしよ――」
「事故って、死ねぇーーっ！」
「――うっぽらぁ！？」
訪れたのは、浮遊・激突・加速・飛翔。端的に言おう。バッティングよろしく、竹刀で打たれたのだ。
不穏な言葉が聞こえた気がするが、気にしないでおこう。こうして、サイコロKは道場から消えた。

―完―

というのは嘘で、後はハンターに任せてある。後は、高みの見物といこう。
「よぉ、タイガにイリヤスフィール。祭りの会場はここか？」　そ

う言ってハンターが道場に入って来た。しかし、その格好を見たタイガとイリヤは固まることになる。
「どうしたんだ？　鳩が豆鉄砲くらったような顔して」
まず、上半身が裸だった。そして、これが大事なのだが……、下半身が橙色のフンドシ一丁だった。ちなみに、フンドシには『ファミ通』とか書いている。
「……えっと。ハンターさん？」
硬直が解けたタイガが“竹刀”を構えながら呼びかける。
「おぅ、何だ？」
「一応訊くけど、その格好は何のつもり？」
そう言うイリヤの体には“赤い紋様”が浮かんでいる。心なしか、さっきまでと口調も違うような……。
「いや、ここで祭をしてるって聞いてよ。それに、これが日本の祭での正装なんだろ」
その言葉にタイガとイリヤは目を合わせると、二人で『せーの』と言って、
「「違ーーーーう！！！！」」
魂の絶叫が道場に木霊した。
「一体、誰がそんなこと言ったのよ？」
しかし、こんな知識を教えたのが誰なのか？　半ば以上に予測できていながらも訊ねるイリヤ。
「さっき、作者から聞いたんだが」
ふはは、計画通り。全てはこのサイコロKの計算通りだ！
「くっそー！　あの立方体め……。今度会ったら粉にしてやる！！」
タイガが悪態を吐いている。しかし、それが自分（サイコロK）に届くことはない。
と、イリヤがハンターに耳打ちしている。すると、ハンターの顔が怒りの形相になる。
「作者め！！　騙しやがったな！」
そう怒鳴って『龍木の古弓【日神】』を取り出す。ええと、この

弓の能力は――
「死ねぇっ！！」
――自動追跡（ホーミング）でした。うん、何か飛んで来てる。
―Ｄｅａｄ－ｅｎｄ（作者が）―
という冗談をやってみた。さて、後はハンターたちに任せよう。
「さて、という訳で仕切り直しよ」
「うむ！　ではまず、我輩がこのコーナーの趣旨を説明してやろう！」
何か、ハンターの様子が明らかにオカしい。その理由を訊ねるイリヤだが、
「あの～。ハンターどうしちゃったの？」
「貴様！　我輩のことは教官と呼ばんか！！」
「は、はいっ！　教官！」
賢い皆様なら、もうお気づきだろう。今ハンターが着ているのは青と白の鎧――『クロオビＸ』なのだ。
「よし！　では、このコーナーの趣旨を説明する！　我輩たちがこのコーナーで紹介するのはバッドエンドだ！！」
「え？　でも教官、ハンタールート（笑）にはバッドエンドが無いんじゃ？」
イリヤが疑問を口にするが、それにはタイガが答える。
「正確には、“嘘”バッドエンドなのだよ、弟子一号！」
「嘘とはどういう意味なんでしょうか？　師匠」
「んー。起こらなかったけど、あり得た可能性ってところかな」
「補足だが、紹介するのはハンタールート（笑）でのみ発生する結末なのだ！
とにかく、百聞は一見にしかず！　見てみるがいい！！」
はい。場面変わりまーす。

第十四話『祖龍』

道場では、今日も士郎が放物線を描いていた。打撃的な意味で……。

朝食後、士郎、セイバー、ハンターの三人は道場で稽古を行っていた。といっても、ハンターが士郎を吹っ飛ばしているだけだったが……。

「――っぐ！！」

ハンターに飛ばされ、床に打ちつけられた士郎が苦悶の声を漏らす。その士郎にハンターが竹刀（布団を巻いている）を突きつける。

「これで、本日十四回目の死亡だな？」

ハンターが息一つ乱さずに言うが、士郎の方は息も絶え絶えといった様子だ。

「シロウ、何度も言っていますが、サーヴァントの攻撃を受け止めようとしているようでは、命がいくつあっても足りません。できるだけ避けるか、受け流すようにしないと」

それは士郎も分かっているのだが、実行するのは難しい。

「まぁ、こればかりは経験を積むしかないな。

なぁに、少しはマシになってるぜ、士郎。一撃で死亡から二撃で死亡になったしな？」

「そ、れは……マシに、なったって、言える……のか？」

ゼエゼエと息をしながら問う士郎にセイバーが答える。

「ハンターの動きを追えるようになっただけでも大きな進歩です。そろそろ、一度休憩にしましょう」

だが、と士郎は思う。今は同レベルの武器だが、実際に戦うとなれば話は違ってくる。昨日のように士郎が投影した“ただの剣”では話にならないだろう。そういえば、

「そういえば、ハンターって剣持ってるよな？」

「あぁ、持ってるが、どうかしたのか？」

「いや、俺でも投影できるのがないかと思ってさ」

その言葉にハンターは『なるほど』と頷くと、
「じゃあ、出すぞ」
そう言うと、ハンターは、『狩人の歩み』から湯水のように剣を吐き出し始めた。
士郎はその剣群を見ていた。たまに変なのが混じっているが、いずれ劣らぬ名剣ばかりだ。
――と。突然、士郎の頭に激痛が走る。否、頭だけではない。全身が『ギシギシ』と悲鳴をあげている。
「がっ？！あぁアぁ！！？」
「シロウ、どうしたのです！？」
「……！」
慌てて駆け寄るセイバーとハンターだが、ハンターは途中で止まる。何故なら、士郎の皮膚が鱗状に並んだ無数の剣になっているのを見てしまったからだ。
そうして、変化が始まる。『バリバリ』と。『ギャリギャリ』と。
生まれたのは、全身を赤錆色の剣状の鱗で被われた竜。
『剣竜エミヤシロウ』――そう呼ばれることとなる怪物が誕生した。

―ｂａｄ―ｅｎｄ―

そうして、舞台は再び道場に戻る。
「――とまぁ、こんな感じだな！　理解したか？　貴様！」
「はい教官！　理解しました！」
何故か敬礼をするイリヤ。それを見て『うむ！』と頷くハンターにタイガが質問する。
「ところで、ハンター。なんでこんなことになっちゃったの？」
「よしタイガ、説明してやろう！　まず、我輩の武器の多くにはドラゴンの因子が含まれているのだ！
そして、士郎はそれを取り込んだ訳だが、ドラゴンの因子が消えて

剣として安定するには、しばしの時間がかかる！」
　しかし、先程のケースでは一気に取り込み過ぎた。
「つまり、体内でドラゴンの因子が暴走した結果がアレってことですね。教官！」
「にしても、『剣竜エミヤシロウ』って……。あんまりにもそのままじゃない、作者」
　そのタイガのダメ出しに反論してみる。
『まあ、ネタとメタが暴走してるコーナーなんで。後、発音はナルガクルガと同じでお願いします』
　だが、声を出したのがマズかった。
「「「死ねぇ！！」」」　次の瞬間には、竹刀と魔力塊と矢が飛んできた。
『うぎゃすっ！！』
　効果は抜群だ！サイコロKは力尽きた……。

番外『タイガー訓練所』（後書き）

では、また一週間後にお会いしましょう。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0782h/

Fate/hunter's answer

2010年10月9日20時32分発行